

(仮)四ツ廻住宅団地造成事業予定地内  
埋蔵文化財発掘調査概報

# 四ツ廻 遺跡

1994年3月

東出雲町土地開発公社  
東出雲町教育委員会

## 例 言

1. 本書は、東出雲町土地開発公社の委託を受けて、東出雲町教育委員会が平成4～5年度の2カ年にわたり実施した(仮)四ツ廻畠地宅地造成事業予定地内埋蔵文化財発掘調査の調査概要報告書である。

2. 調査組織は次の通りである。

事務局 [平成4年度]

前田 喬（教育長）、広江則光（社会教育課長）

[平成5年度]

前田 喬（教育長～5月まで）、安達伸次（教育長5月～）、広江則光（社会教育課長）

調査員 [平成4年度]

江川幸子（東出雲町土地開発公社嘱託）

[平成5年度]

浅沼政誌（社会教育課主任主事）

調査指導者 石井 悠（鹿島町立鹿島中学校教諭）

足立克己（島根県教育庁文化課文化財保護主事）

角田篤幸（ 同 主事）

作業員 阿式忠治、石倉健一、石倉春光、石倉義雄、石倉美恵子、石田 宏、石原勝年、  
石原隆代、石原哲朗、稻田薫子、今岡元和、小室大栄、加藤好子、金森 房、  
川崎 清、小竹益子、小竹沙代子、小室範明、佐次仁史、祖田俊広、田中助一、  
永島達也、野々内縫子、長谷川孝志、細田尚徳、前島春枝、三原景雄、吉儀すい

遺物整理 田原まり子、山本千草

3. 本書で使用した遺構略号は、次の通りである。

SI-竪穴式住居跡、SB-掘立柱建物跡、SD-溝、P-柱穴

4. 掘図中の方位は調査時の磁北を示す。

5. 本書に掲載した「遺跡地図」作成にあたっては、建設省国土地理院発行の地形図を、「調査区配置図」は、東出雲町道路台帳を淨写して使用した。

6. 出土遺物、実測図及び写真は東出雲町教育委員会に保管してある。

## 目 次

|                     |    |
|---------------------|----|
| 1. 調査に至る経緯.....     | 1  |
| 2. 遺跡の位置と歴史的環境..... | 1  |
| 3. 調査の経過.....       | 4  |
| 4. 調査の概要.....       | 7  |
| (1) 遺構.....         | 7  |
| (2) 遺物.....         | 19 |
| 5. 小結.....          | 25 |

## 1. 調査に至る経緯

現在平成9年度供用開始を目指して、高規格道路「米子松江線」の整備が進められているが、このうち東出雲町地内は「安来道路」として延長5.2kmの整備が進められている。道路建設にあたっては工事による大量の残土処理が問題となり、この残土の有効利用が課題となっていた。一方島根県は人口の減少が深刻な状況にあり、その対策が重要な課題となっている。このような状況の中、東出雲町でも人口定住対策が重要な課題となっていた。そこで人口定住対策にあわせ、高規格道路建設による残土の有効利用を図るために、住宅団地建設が計画された。建設地の選定にあたっては、残土搬入の利便性と農地保護の立場から「安来道路」建設予定地に近接した場所が適当と決定されるに至った。この決定を受けて平成3年度東出雲町教育委員会は現地踏査を実施したが、地表観察では遺構、遺物等が発見されず、平成4年度にトレンチを入れて、再度調査を行った。この結果、予定地の一部で遺構、遺物が発見され、その広がりが確認されるに至った。

以上の経緯を経て、本調査を平成4、5年度の2カ年にわたり実施し、平成5年11月8日をもって、現地でのすべての作業を終了した。

## 2. 遺跡の位置と歴史的環境

四ツ廻遺跡は、国道9号線から約500m南に下った東出雲町字四ツ廻に所在し、南北に延びる尾根の標高10~20mの東側斜面に広がっている。遺跡に面して狭小な谷底平野が中海に向かって延び、近年まで耕作されていた湿田を望むことができる。また本遺跡の南側には松江-米子間の高規格道路建設が予定されており、島根県教育委員会によって埋蔵文化財発掘調査が進められている。このうち本遺跡に接した四ツ廻II遺跡では、古墳時代後期の玉作工房跡が発見されている。この他にも遺跡の周辺には縄文時代以降の多くの遺跡が見られ、松江から米子に至る遺跡密集地として知られている。

縄文時代の遺跡は意宇平野縁辺に多く見られ、竹矢小学校校庭遺跡、さっぺい遺跡、竹の花遺跡、春日遺跡などが知られている。このうち本町所在の竹の花遺跡では前期の土器が、春日遺跡では晩期の土器が発見されている。

弥生時代になると、布田遺跡、春日遺跡、磯近遺跡、古城山遺跡、寺床遺跡、夫敷遺跡など意宇平野中央部をはじめ微高地などに遺跡の広がりが見られ、その数が急増する。このうち低湿地に所在する磯近遺跡では中期前半の壺形土器が発見され、加えて土器の中には初殻痕が認められるもの

もある。また同様に夫敷遺跡では水田跡が発見されており、当時の稻作農耕を探るうえで貴重な資料となっている。その一方で微高地に所在する寺床遺跡では、前期の竪穴集落跡が発見されるなど、当時の住居生活を窺い知ることができるものもある。更に松江市竹矢町平浜八幡宮所蔵の伝竹矢出土細形銅劍は、当地における青銅器文化の広がりを知る上で貴重な資料となっている。

古墳時代になると、古墳を中心として遺跡の数は急増する。前期の古墳として最も知られているものに寺床1号墳がある。寺床1号墳は27.5m×22.3mの長方形墳で、主体部には長さ4.6mにもおよぶ割竹形木棺がそなえられ、排水施設を持った礫床構造となっている。また副葬品には船載と考えられる斜縁二神二獸鏡、硬玉製勾玉、鉄劍、鉄製太刀があり、典型的な前期古墳の特徴を示している。この他にも船載の内行花文鏡が出土した古城山古墳、木棺を直葬した大木権現山1号墳が知られている。

中期になると、春日岩舟古墳（大草岩舟古墳）や大木権現山2号墳が築造されるが、本町においてはこれ以外の遺跡はあまり知られていない。春日岩舟古墳は、自然の岩を舟形に穿って作られた石棺を主体部に持つ古墳であり、また大木権現山2号墳では箱式石棺並びに三連櫛、形象埴輪、円筒埴輪が検出されている。

後期になると遺跡数は急激に増加する。切石を使用した石棺式石室を内部構造に持つ栗坪D1号墳をはじめとする栗坪古墳群、渋山池古墳群、焼田古墳群など群集墳が多く築造されるようになる。栗坪D1号墳は、一辺約14mの複室構造を持つ方墳で、玄室の四壁及び天井はそれぞれ一枚の板状石で構成され、内部は妻入りの稜線が刻まれている。遺物は盜掘を受けていたためごくわずかしか残存していないが、鉄製太刀、白メノウ玉がある。また内馬池横穴墓群、四ツ廻横穴墓群など平野に面した舌状尾根斜面には、多くの横穴墓が存在する。このうち内馬池横穴墓群は、屍床、排水溝を持った四注式の横穴墓として知られ、古城山横穴墓群では一部丸天井が確認されている。統じてこれらの横穴墓は丸天井、四注の両様式が併存しており、当地方における横穴墓のあり方と同じ様相を示している。

律令制時代になると本町に隣接した松江市大草町に出雲国府が置かれ、出雲國分寺、國分尼寺が建立されている。『出雲國風土記』では、東出雲町振屋、意東あたりが「余戸里」として記されているものの、本町ではこの時代の遺跡が発掘調査によりほとんど発見されていないため、あまり当時の様子を知ることはできない。しかし本町にも当時の条里制跡が及んでいる様子を、航空写真等により確認することができる。また東出雲町夫敷は、現在地に国府が確定されるまで、有力な国府准定地として知られた場所である。



1. 四ツ廻遺跡
2. さっべい遺跡
3. 春日遺跡
4. 竹の花遺跡
5. 布田遺跡
6. 機近遺跡
7. 夫敷遺跡
8. 流田遺跡
9. 寺床遺跡
10. 古城山古墳
11. 大木権現山古墳群
12. 春日岩舟古墳
13. 落坪古墳
14. 渋山池古墳群
15. 焼田古墳群
16. 古天神古墳
17. 錦津古墳群
18. 荷延古墳群
19. 四ツ廻II遺跡
20. 林羅遺跡
21. 平賀古墳群
22. 焼田遺跡
23. 高井横穴墓群
24. ヤジ山横穴墓群
25. 四ツ廻横穴墓群
26. 島田池横穴墓群
27. 後谷横穴墓群
28. 古城山横穴墓群
29. 内馬池横穴墓群
30. 安部谷横穴墓群
31. 出雲國庁
32. 才の峰遺跡

図1 四ツ廻遺跡の位置と周辺の遺跡

### 3. 調査の経過

平成4年度は、住宅団地造成予定地約6haの中で、遺跡有無の確認とともにその広がりを確認することに重点を置いた。調査の便宜上尾根ごとにそれぞれA区、B区、C区、D区、E区、F区と名称を付し、平成4年4月8日から順次地表観察並びにトレンチ堀りによる調査を実施した。この結果、F区において遺物並びに遺構が発見され、協議の結果引き続き本調査に入ることになった。従ってF区がこの四ツ廻遺跡にあたる。平成4年後は調査対象面積約1,700m<sup>2</sup>の内、北側700m<sup>2</sup>について調査を実施した。F区の調査にあたっては、立木の伐採、搬出にてまとったが、7月20日から表土除去を開始し、12月29日をもって平成4年度の調査を終了した。

平成5年度は、平成4年度に引き続き残り1,000m<sup>2</sup>について調査を実施した。平成5年4月12日から表土除去を開始したが、近年にない天候不順のため作業が遅々として進まないため、途中表土除去に機械を使用し作業の効率化を図った。9月も下旬になると天候が回復し、好天が続いたため作業も順調に進み、11月8日をもって現場での調査をすべて終了した。

なお調査にあたっては、遺構・遺物実測の便宜上、尾根にほぼ並行して南北ラインを設定し、基点を調査区東北端に置いて、5m×5mのグリッドを組んだ。

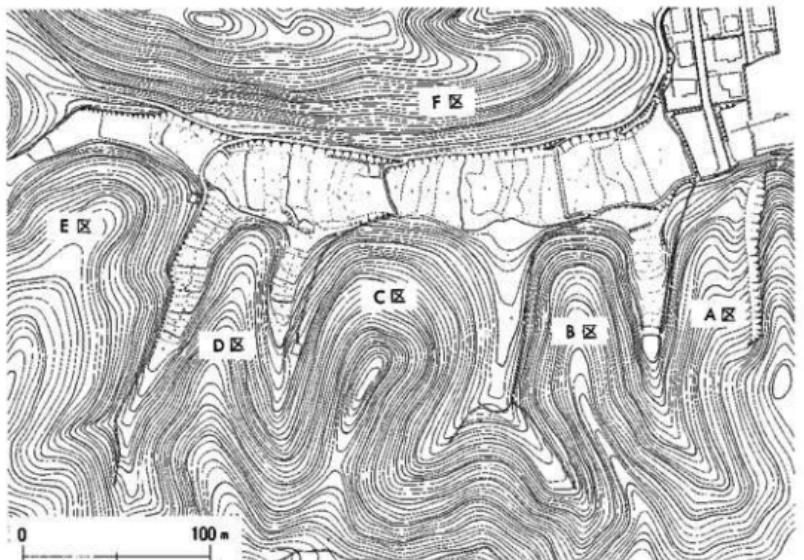


図2 調査区位置図

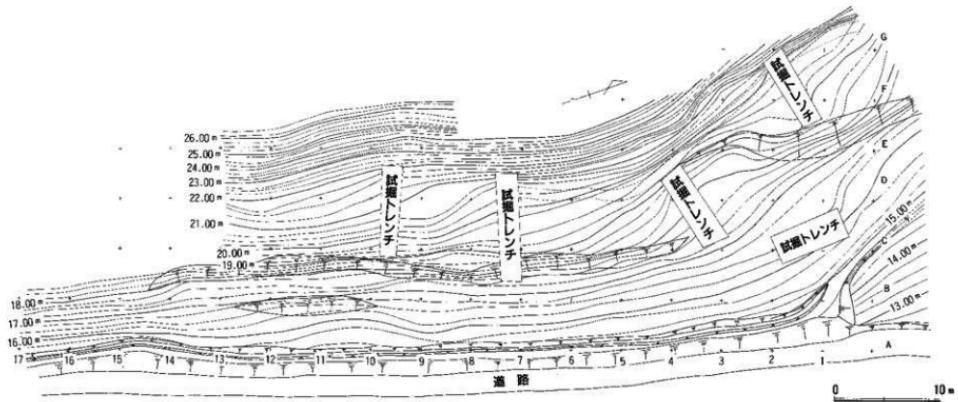


図3 発掘前地形測量図

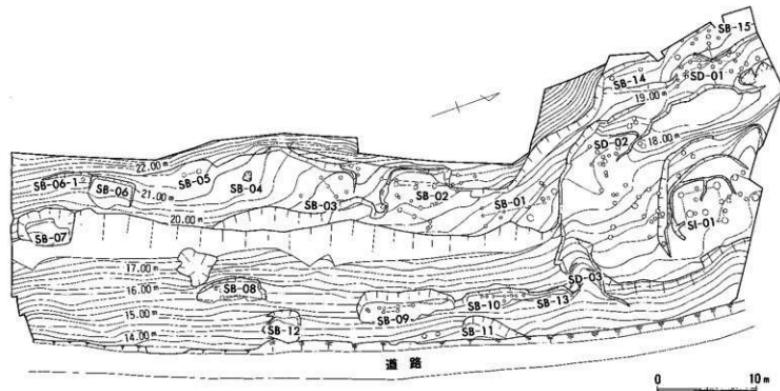


図4 造構配図

## 4. 調査の概要

四ヶ所遺跡は南から北に延びる尾根の標高13~20mの東斜面に位置する。調査区北側は尾根の先端にかけて緩やかに下る平坦面が広がっており、ここで竪穴住居1棟(SI01)を検出した。またSI01の周囲に溝状遺構(SD01,02,03)と、多量のビットを検出した。またSD01の西に接して掘立柱建物跡(SB14,15)を検出した。これらの遺構から南側には、尾根に沿って上下2段にわたり平坦面が広がり、上段では掘立柱建物跡(SB01,02,03,04,05,06-1,07)を、下段においても同様に掘立柱建物跡(SB08,09,10,11,12,13)を検出した。

### (1) 遺構

#### SB-01(図5)

調査区中央よりの西端、標高18.5mに位置する。西側の急斜面を削って奥壁を作り、東面するよう配置されている。奥壁は両側が残存し、北側は確認できなかった。床面は、北側が削平されているため詳細は不明であるが、推定床面規模は東西約4.4m、南北約8.4mを測る。柱穴は多数検出したものの、南北方向に3間分だけ並ぶことが確認できた。P1は南北径30cm、東西径30cm、深さ35cmを測る。P2は南北径30cm、東西径34cm、深さ55cmを測る。P3は現存で南北径26cm、東西径

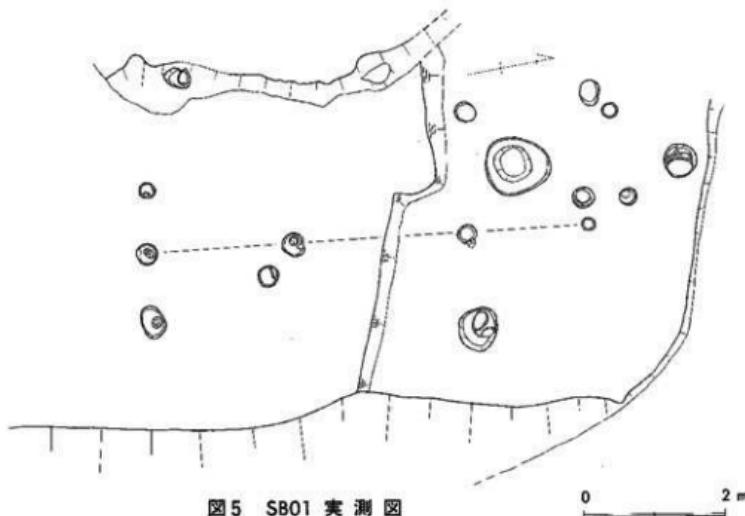


図5 SB01 実測図

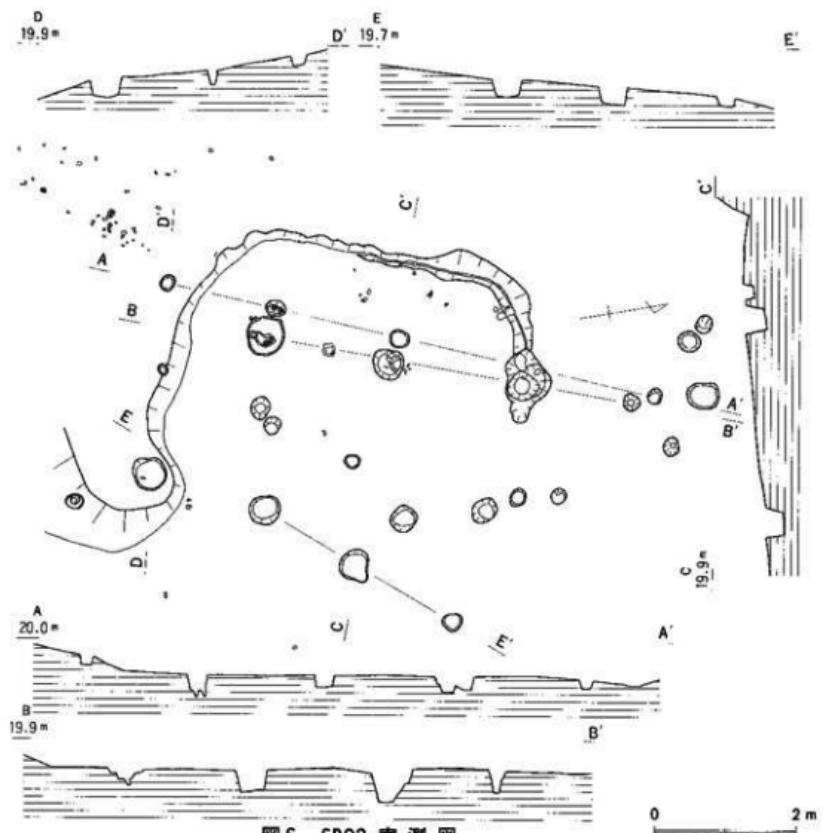


図6 SB-02 実測図

24cm、深さ32cmを測る。P4も同様に南北径18cm、東西径19cm、深さ13cmを測る。柱間距離はP1～P2が2m、P2～P3が2.4m、P3～P4が1.7mを測る。

遺物は、遺溝上面に堆積していた遺物包含層のものと床面出土のものがあり、土師器を中心となっている。遺物からみると、古墳時代中期から後期にかけて数次の建て直しが施されていたと考えられる。

#### SB-02(図6)

SB-01の南側に接し、約50cm高い標高19mに位置する。SB-01同様、西側急斜面を削って奥壁を作り、東面するように配置されている。周壁は北から南にかけ西半部を囲むように削り出されており、一見、堅穴住居のように見える作りである。周溝は北西部に巡る以外は確認できなかった。

床面は一辺約4mの方形を示している。柱穴は南北方向に2列、4間と3間分と、東北方向に1列、2間分が確認できた。P1は南北径20cm、東西径22cmで深さ13cmを測る。P2は南北径29cm、東西径23cmで、深さ31cmを測る。P3は南北径28cm、東西径24cm、深さ

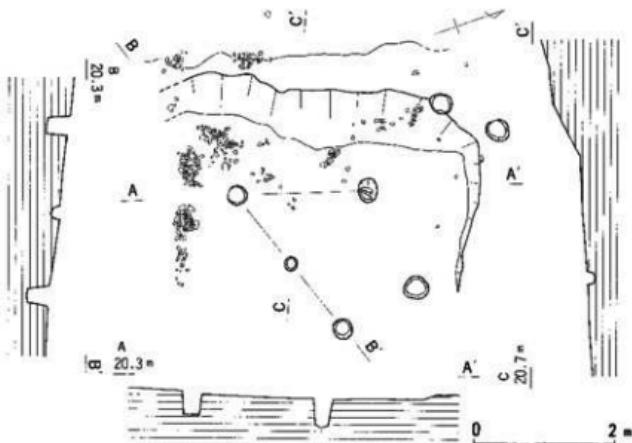


図7 SB03 実測図

16cmを測る。P4は推定南北径32cm、東西径30cmで、深さ22cmを測る。P5は南北径20cm、東西径22cmを測る。P6は南北径53cm、東西径55cmで、深さ24cmを測る。P7は南北径44cm、東西径41cmで、深さ30cmを測る。P8は南北径42cm、東西径40cmで、深さ42cmを測る。P9は南北径22cm、東西径24cmで、深さ30cmを測る。柱間はP1～P5がそれぞれ1.54m、1.80m、1.74m、1.92mで、P6～P9がそれぞれ1.80m、1.90m、1.56mである。P1～P5並びにP6～P9は、現存する周壁と同じ向きにあるものの、その区域よりも南北方向に延びている。周壁と適合すると考えられるのはP2～P4、P6～P8であるので、後世これらのピットを再利用して建物の建て直しが行われたものと考えられる。遺物は、床面あるいは堆積していた遺物包含層から土師器を中心として出土しており、古墳時代中期から後期にかけての建物跡と考えられる。

#### SB-03(図7)

SB-02から約3m南の標高20.5mに位置する。周壁は北から西にかけて巡り、地山を削り出すことによって平坦面が作られている。奥壁西側には幅約50cmの平坦面が残存しており、SB-03以前に、このレベルで遺構が存在していたと考えられる。現存床面は一辺約4mを測る。柱穴は南北方向に1間分と、東北方向に2間分並ぶことが確認できた。P1は南北径28cm、東西径27cmで、深さ33cmを測る。P2は南北径26cm、東西径33cm、深さ

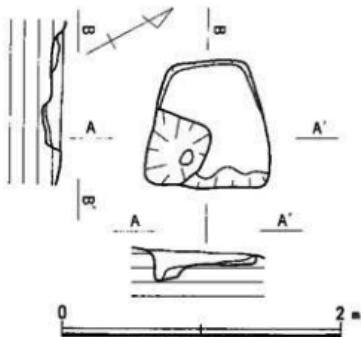


図8 SB04 遺跡実測図

40cmを測る。P3は南北径16cm、東西径19cmで、深さ12cmを測る。P4は南北径26cm、東西径28cmで、深さ30cmを測る柱間はP1～P2が1.84m、P1～P4がそれぞれ1.20mを測る。遺物は床面及び遺物包含層から大量に出土しているが、古墳時代中期から後期にかけての土師器が中心となっている。

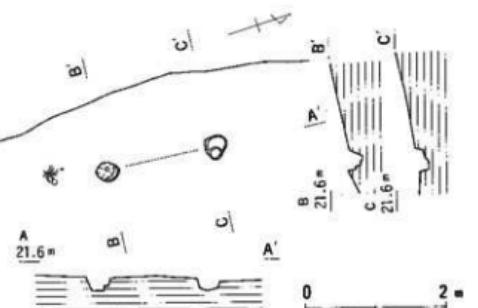


図9 SB05 実測図

#### SB-04(図8)

SB-03の南に接した標高20.5mに位置する。周壁は存在せず、一辺約5m四方の平坦面が存在し、その平坦面のほぼ中央に、地山を掘り込んで作られた竈が確認できた。この周辺には柱穴等は確認できていない。竈跡は、東西長90cm、南北長辺86cm、短辺54cmを測る。南東隅は深く掘り込まれており、ここで深さ22cmを測る。竈内には炭化物が堆積していたが、遺物は認められなかった。また竈の周囲は、一部粘土状のもので固められていた痕跡が認められたものの、ほとんど焼けていなかった。しかし、周囲からは移動式の竈、土製支脚片が大量に出土していることから、共同炊事場として利用されていたと考えられる。

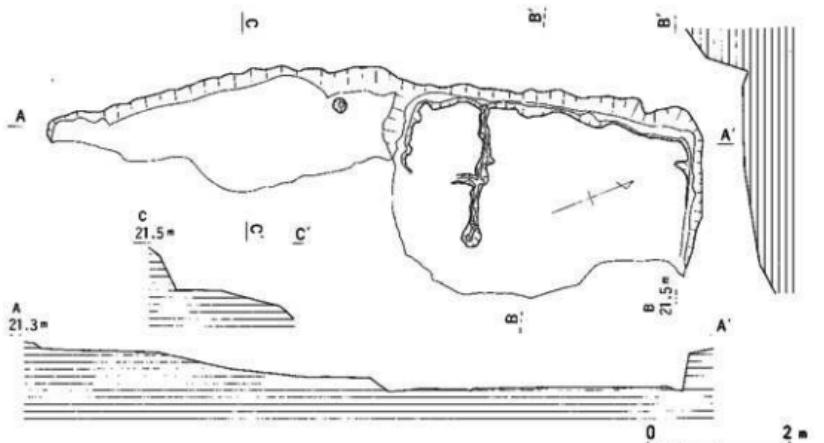


図10 SB06, 06-1 実測図

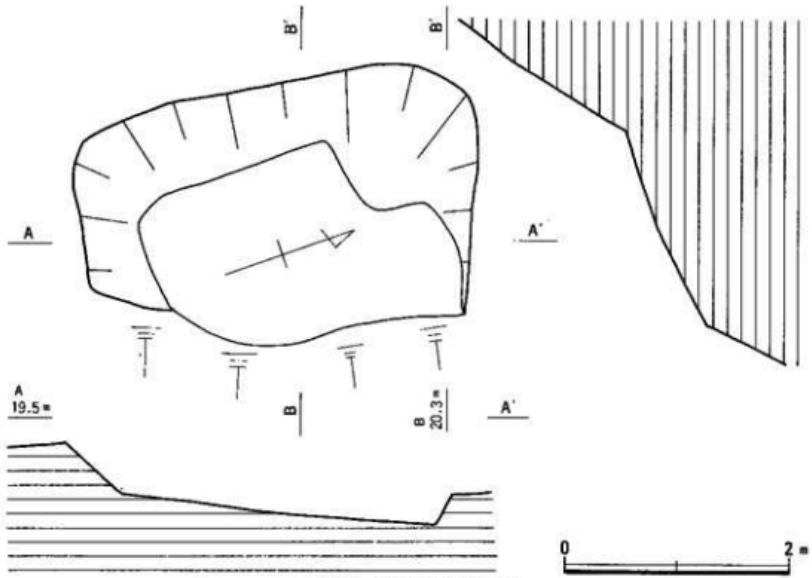


図11 SB07 実測図

SB-05 (図9)

調査区の中で最も高所に位置し、標高21.0mを測る。斜面を利用して奥壁を作り出しているが、明瞭ではない。柱穴は2穴あり、1間分のみ確認できた。P1は南北径33cm、東西径29cmで、深さ20cmを測る。

P2は南北径32cm、東西径32cmで、深さ14cmを測る。遺物は古墳時代後期の須恵器が出土している。

SB-06, 06-1

(図10)

SB-05から南へ少し下がった標

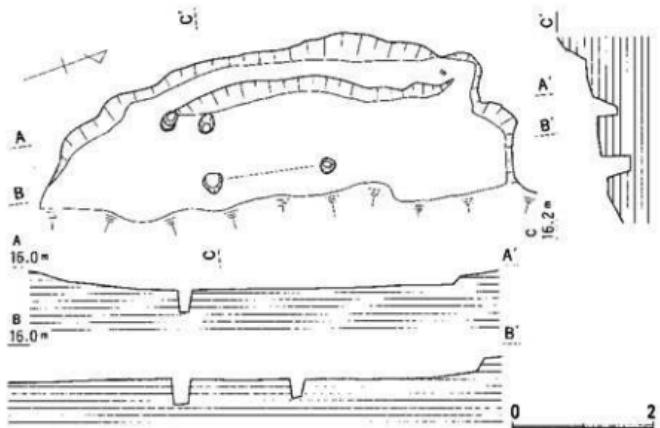


図12 SB08 実測図

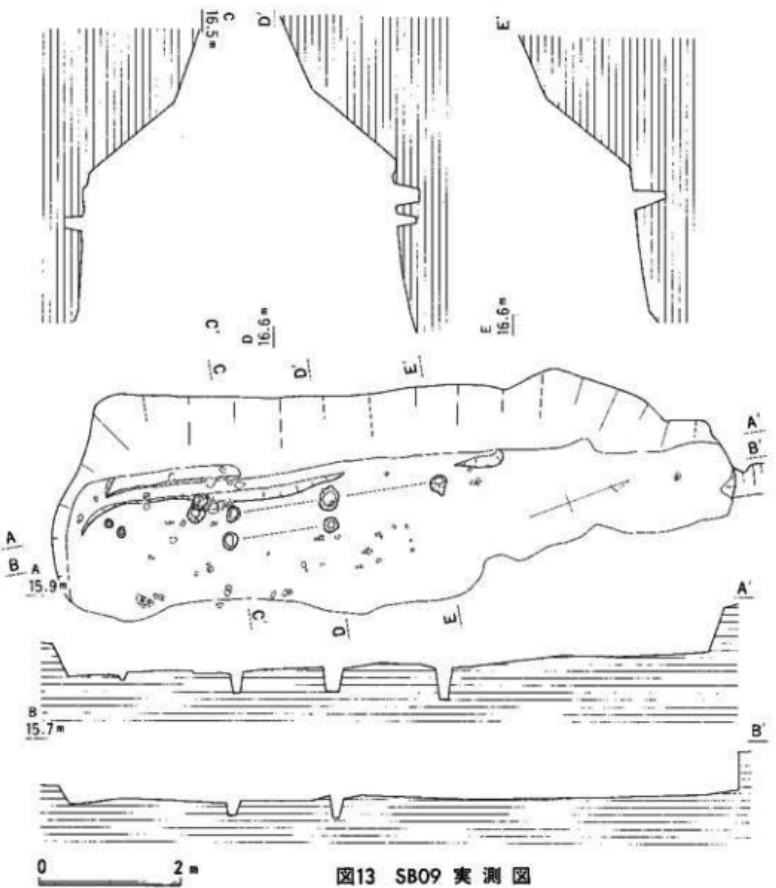


図13 SB09 実測図

高20.5mに位置する。SB-06は周壁を北から南にかけ、削り出すことによって作り、東面するよう配置されている。周壁に沿って縦約10cmの周溝が掘り込まれ、床面の南側部分にも東西に溝が掘り込まれている。床面規模は南北長4.20m、東西最大長2.70mを測る。柱穴は全く確認できず、礎石らしき石材も確認できなかった。従って、床に直接木材を据え、建物が構築されたのではないかと考える。遺物は床面からは出土していないが、遺物包含層からは古墳時代後期の須恵器が主に出土している。

SB-06-1は、SB-06より床面レベルで20cm高所に位置し、床面規模南北長4.60m、東西最大

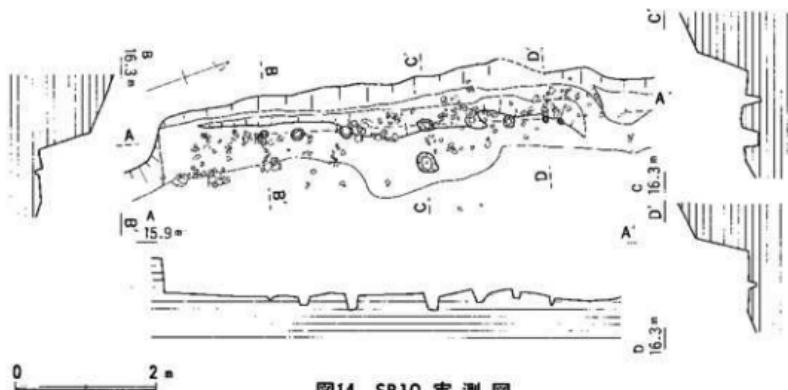


図14 SB10 実測図

長1.46mの南北に狭小な形を示している。柱穴は1穴確認できたのみで、南北径19cm、東西径22cm、深さ38cmである。奥壁がSB-06と連続して掘り込まれていることや、出土遺物から、ほぼ同時期に作られたものと考えられる。

#### SB-07 (図11)

SB-06-1から東へ下った標高19.0mに位置する。ちょうど上下平坦面の間に南北に走る斜面を深く削りだして作られている。床面から奥壁上面までは1.60mを測り、奥壁北西隅は床面に向かって張り出しているため、いびつな形を示している。柱穴は全く確認できなかった。遺物は床面出土のものは無く、遺物包含層から古墳時代後期のものが出土している。

#### SB-08 (図12)

下部平坦面の最も南、標高15.5mに位置する。緩やかに東に下る平坦面を削り出すことによって加工段が作られている。周壁は、北から西にかけては鋭角的に削り出されているが、西から南にかけては緩やかに内湾する。奥壁に沿って幅20~36cmの加工段が削り出されている。柱穴は4穴確認できたが、その内南北に1間分だけ並ぶことが確認できた。P1は南北径28cm、東西径30cmで、深さ36cmを測る。P2は南北径20cm、東西径22cmで深さ28cmを測る。柱間は1.64mを測る。遺物は床面から古墳時代後期の須恵器が出土している。

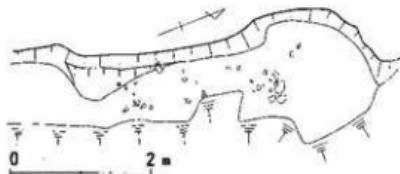


図15 SB13 実測図

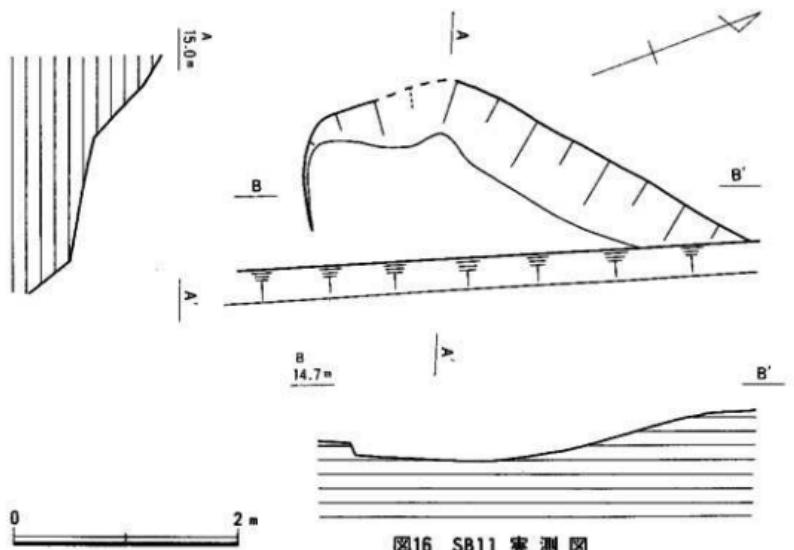


図16 SB11 実測図

#### SB-09 (図13)

SB-08の約8m北側、標高15mに位置する。緩やかに東へ下る平坦面を深く削り出して加工段が作られている。床面から奥壁上縁までは1.20mを測り、奥壁に沿って、幅約18cmの溝が掘り込まれている。床面規模は南北長9.40mで東西最大長2.18mを測る。柱穴は南北方向に2列、2間と1間分が確認できたが、これらに対応する東西方向の柱穴は確認できなかった。P1は南北径18cm、東西径22cmで深さ30cmを測る。P2は南北

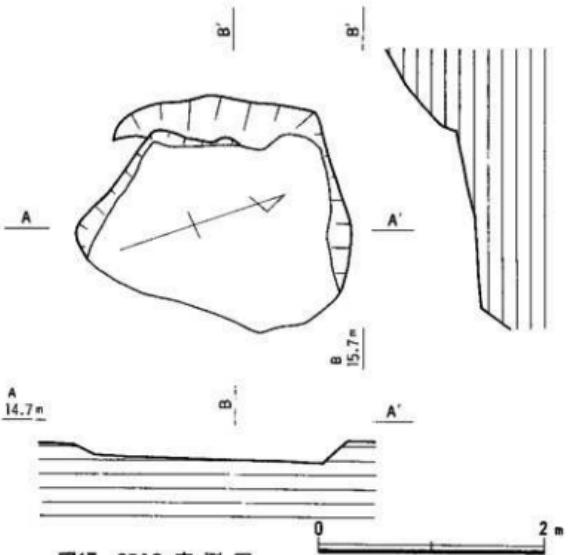


図17 SB12 実測図

径29cm、東西径33cmで、深さ35cmを測る。P 3は南北径23cm、東西径30cmで、深さ46cmを測る。P 4は南北径20cm、東西径24cmで深さ18cmを測る。P 5は南北径20cm、東西径20cmで、深さ29cmを測る。柱間はP 1～P 2が1.36m、P 2～P 3が1.56mで、P 4～P 5が1.45mを測る。遺物は床面から古墳時代後期のものが出土している。

#### SB-10（図14）

SB-09の北側に接して、同じレベルに位置する。奥壁は緩やかな平坦面をえぐり取ったよう削り出されており、床面と奥壁上縁はほぼ垂直に近い角度を保っている。奥壁に沿って幅18～52cmの溝が掘り込まれている。床面規模は南北長6.14m、東西最大長1.32mを測り、床面中央部付近では東に0.40～0.60m張り出し、この張り出し部分に柱穴が1穴存在する。柱穴は南北方向に1列、柱間が不規則な形で確認できた。P 1は南北径10cm、東西径10cmで、深さ5cmを測る。P 2は南北径18cm、東西径16cmで、深さ12cmを測る。P 3は南北径18cm、東西径17cmで、深さ22cmを測る。P 4は南北径23cm、東西径15cmで、深さ22cmを測る。P 5は南北径20cm、東西径20cmで、深さ18cmを測る。P 6は南北径14cm、東西径17cmで、深さ10cmを測る。P 7は南北径8cm、東西径10cmで、深さ12cmを測る。柱間はP 1～P 2が0.48m、P 2～P 3が0.68m、P 3～P 4が1.14m、P 4～P 5が0.64m、P 5～P 6が0.52m、P 6～P 7が0.52mを測る。床面が狭小であることも考えあわせると、棚列状のものが構築されていた可能性がある。遺物は、床面から古墳時代後期のものが中心となって出土している。

#### SB-13（図15）

SB-10の北に接した同じ加工段上に位置し、周壁南側を湾曲させることでSB-10と区別されている。床面はいびつな形を示し、東西最大長1.74m、最小長0.52m、南北長3.80mを測る。柱穴、周溝等は全く確認できなかった。遺物は古墳時代後期のものが中心である。

#### SB-11（図16）

SB-10から東に下った標高13.5mの、調査区中最も低いレベルに位置する。遺構の一部は南北に走る道路により削平されている。奥壁は東北から南西にかけて延び、南西の周壁は東に回り込む

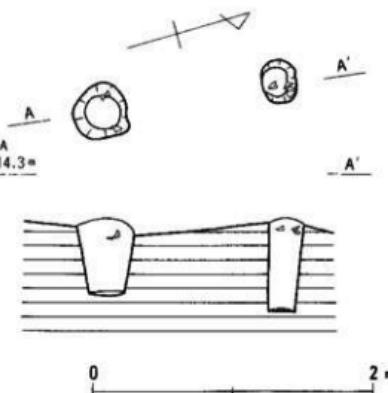


図18 SB11 南側ピット実測図

よう内湾している。他の遺構と異なり、南東に面するよう配置されているのが特徴となっている。柱穴、周溝は確認できなかった。遺物は、床面出土のものはなかったが、遺物包含層から古墳時代中期の土師器が出土している。

**SB-12 (図17)**  
SB-08の北東、標高14.0mに位置する。床面は台形を示し、南北長辺3.30m、短辺2.40m、東西長2.40mを測る。柱穴、周溝は確認できなかった。遺物は床面出土のものではなく、遺物包含層から古墳時代中期のもの

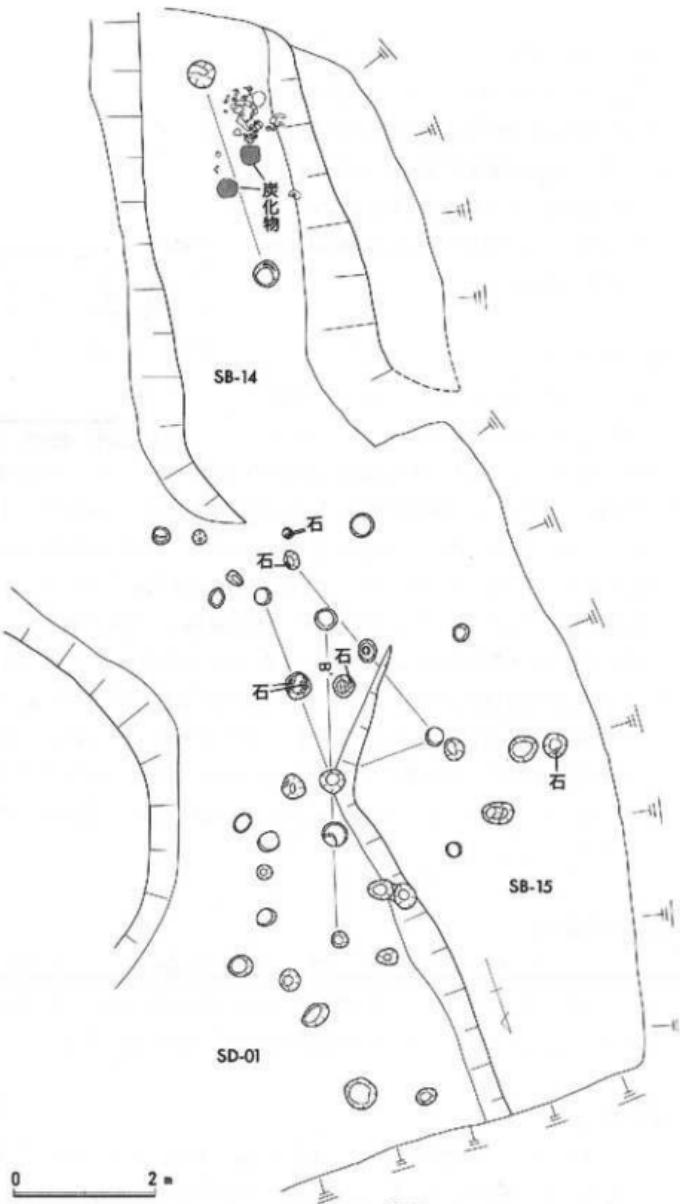


図19 SB14, 15, SD01 実測図

が出土している。

SB-11南側ピット（図18）

SB-11から約2m南に、南北に並ぶ柱穴を2穴確認した。  
P1は南北径40cm、東西径40cm  
で、深さ46cmを測る。P2は南



図20 SD02 実測図

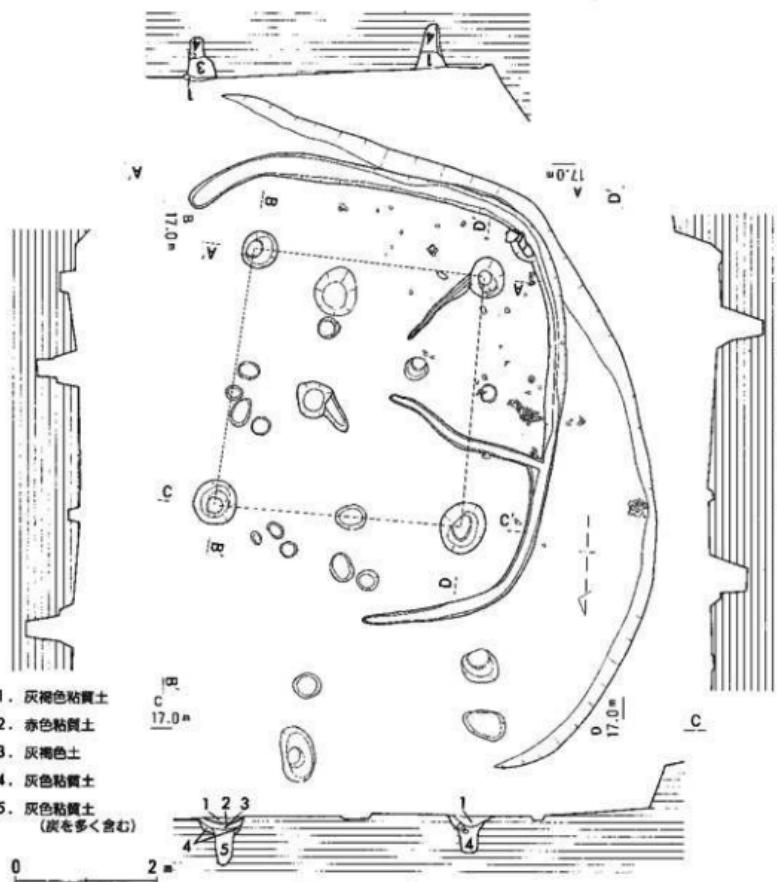


図21 SI01 実測図

北径24cm、東西径32cmで、深さ60cmを測る。柱間は1.24mを測る。遺物は柱穴上縁付近から、古墳時代後期の遺物が出土している。

#### SB-14,15,SD-01 (図19)

SB-14は調査区北西隅、標高19.5mに位置する。西側にはSB-14より一段高いレベルで加工段が存在する。SB-14の北側には遺構を区切る明瞭なラインは確認できなかった。床面規模は南北長7.10m、東西長2.10mを測る。柱穴は2穴南北に1間分確認できた。P1は南北径40cm、P2は東西径40cmで、深さ63cmを測る。P2は南北径36cm、東西径35cmで、深さ30cmを測る。柱間は3.0mを測る。遺物はSB-14奥壁南西隅で土器が集中的に出土している。

SB-15はSB-14から北に約2.40m離れた標高19.0mに位置する。遺構を区切るラインは、南側では確認できなかった。床面規模は南北長6.80m、東西長3.10mを測る。柱穴はいくつか検出したが、建物跡に結びつくものは確認できなかった。

SD-01は、SB-15の加工段を削りだしてできた壁と、東側の地山を削りだしして作られた壁によって構成される溝で、南から北に緩やかに傾斜する。規模は南北長8.00m、東西最大幅4.80m、最小幅2.10mを測る。柱穴は多数検出できたが、建物跡に結びつくものは2間規模のものが3列確認できるに留まった。

#### SD-02 (図20)

SB-14からやや東に下った標高18m～17.5mに位置する。北から東にかけ大きく湾曲し、遺構東側は明瞭なラインを確認することができなかった。残存長5.60m、最大幅4.20mで緩やかに東へ下る。

#### SI-01 (図21)

調査区の最も北に位置し、標高15.5mに位置する。平面形は隅丸方形の竪穴住居で、規模は一辺5.20mを測る。緩やかに下る斜面を垂直に削り込んで、弧を描くように周壁を作りだし、そしてこのラインには沿わずに周溝を配置している。周溝は幅30cm前後で、北半分から南東隅にかけて巡っており、床面中央付近からこの周溝に接して溝が掘り込まれている。柱穴を多数検出したが、建物に結びつくものは5穴であった。P1は南北径

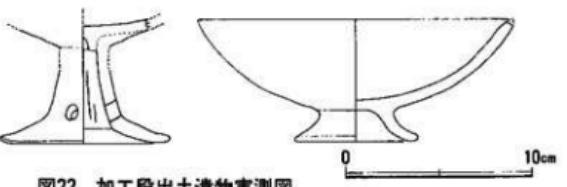


図22 加工段出土遺物実測図

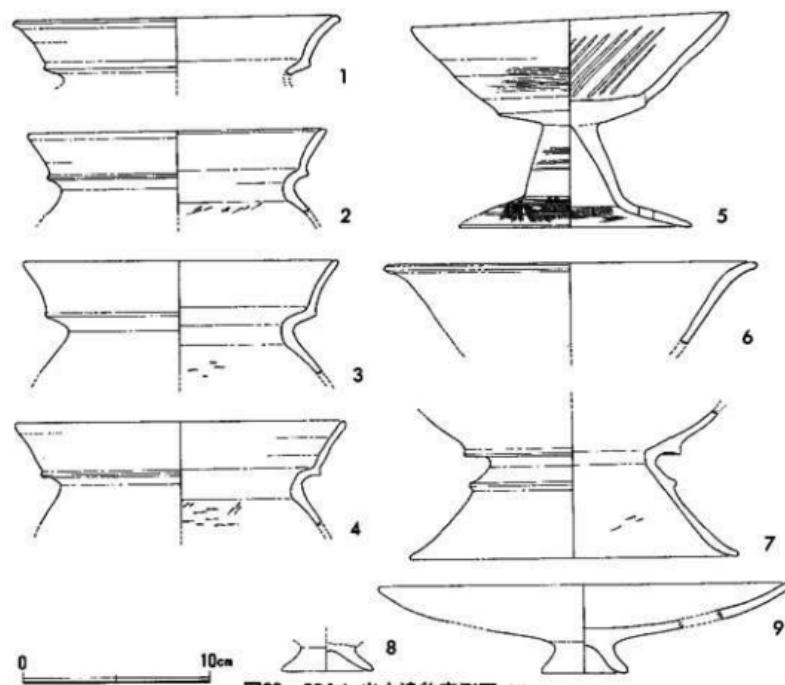


図23 SB14 出土遺物実測図 (1)

60cm、東西径46cm、深さ62cmを測る。P 2は南北径52cm、東西径48cm、深さ56cmを測る。P 3は南北径62cm、東西径60cm、深さ70cmを測る。P 4は南北径71cm、東西径63cm、深さ53cmを測る。中央ピットは南北径51cm、東西径40cm、深さ72cmを測る。柱間は3.30～3.60mを測る。

## (2) 遺 物

ここでは平成4年度調査により出土した遺物についてのみ触れることにし、平成5年度分については、機会を改めて報告することにしたい。

### 加工段出土遺物（図22）

SB-14西に接した加工段からは3個体の土師器高环脚部が出土したが、実測できたのは1点のみである。焼成は良好で、孔を3ヵ所に穿っている。図22の2は加工段からやや下った位置で堆積土中に埋もれていた低脚環である。焼成は極めて悪く、調整は一切不明である。

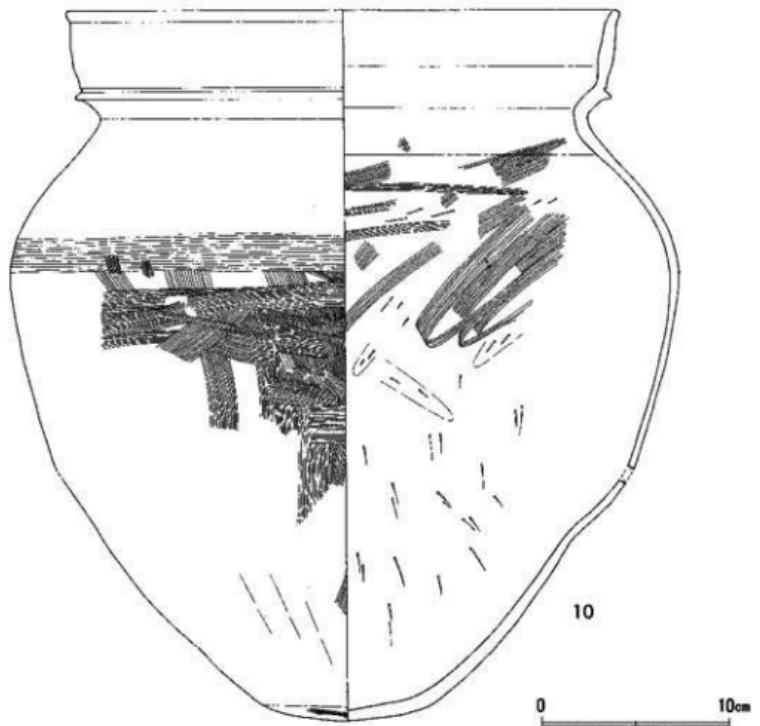


図24 SB14 出土遺物実測図 (2)

**SB-14出土遺物 (図23・24)**

SB-14上の土器溜まりから出土したもので、甕4個体、大甕1個体、高坏1個体、鼓形器台1個体、低脚坏2個体がある。図23の1～4は複合口縁の甕の口縁部から肩部にかけてのものである。口縁部はやや外反気味で、内外面とも調整は横ナデ、肩部以外の外面は刷毛目、内面は丁寧なケズリを施している。図23の5は高坏である。坏部の調整は外面が横方向の丁寧な磨き、内面は横方向と思われる丁寧な磨きの後、一定間隔をもって施した右斜め上がりの飾り磨きを施している。脚部は外面上半部が横方向の丁寧な磨き、下半部は縦方向の細かい刷毛目後、所々同心円上に磨きを巡らせていている。脚部内面下部は横方向の刷毛目で、3カ所に孔を穿っている。図23の6、7は鼓形器台である。全体に風化が著しいが、底部付近の内面にはわずかにケズリの痕跡が残る。図23の9は低脚坏である。底部は残存するが、坏部はほとんど欠損している。口縁が大きく開く偏平なタイプと考えられ、底部調整はナデで、坏部は風化のため不明である。図24の10の大甕は焼成が極

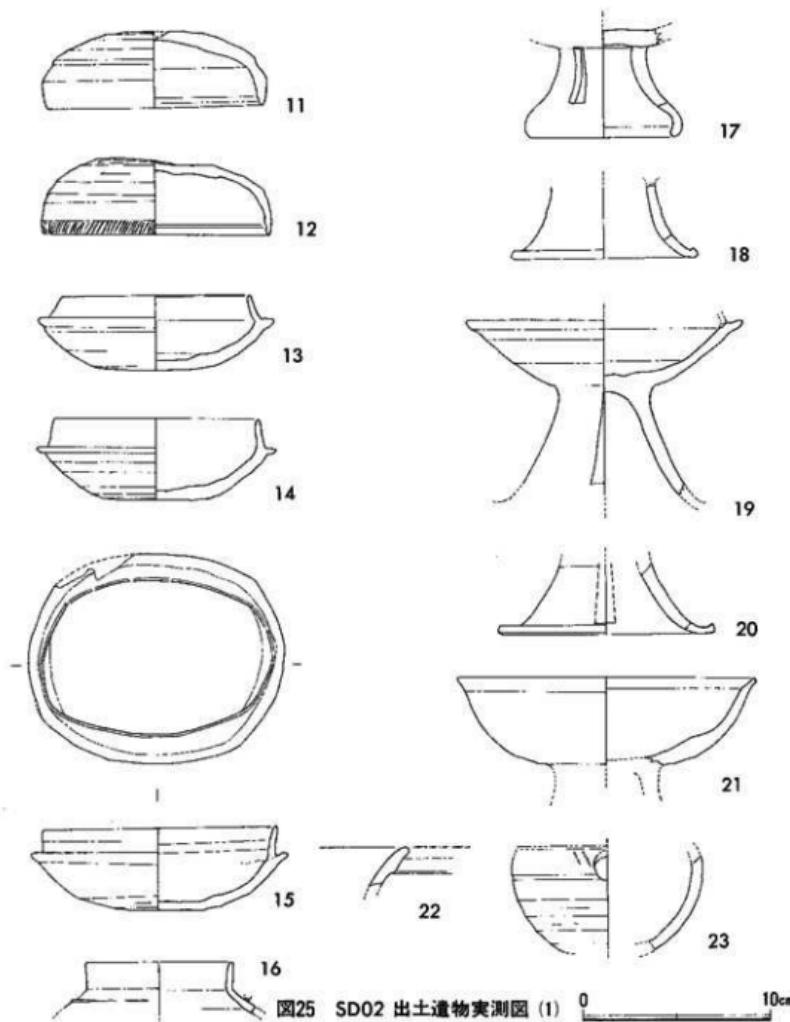


図25 SD02 出土遺物実測図 (1)

10cm

めて良好である。調整は口縁付近が内外面とも横ナデ、頸部外面はナデやヘラの押し当てを行った後、細かい刷毛目を施し、最後に肩部の張り出しに間隔の広い刷毛目を一巡している。底はやや平底を意識した丸底で、細かい刷毛目痕が残る。内部調整は頸部以外に丁寧なケズリを行った後、上半部には所々刷毛目を施している。胸部器壁は最も薄いところで3mm弱と極めて薄く、底部付近で

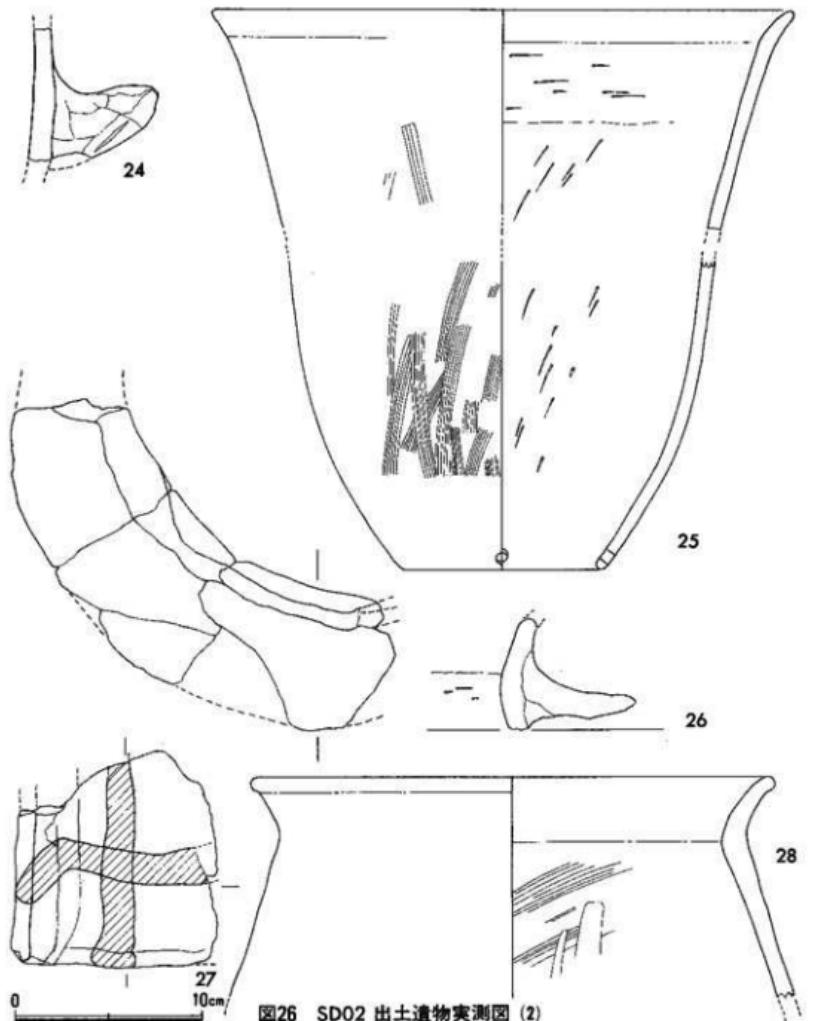


図26 SD02 出土遺物実測図 (2)

やや肥厚している。底から2~3cm上がった位置から幅約6~7cmにわたり、帯状にススが付着している。

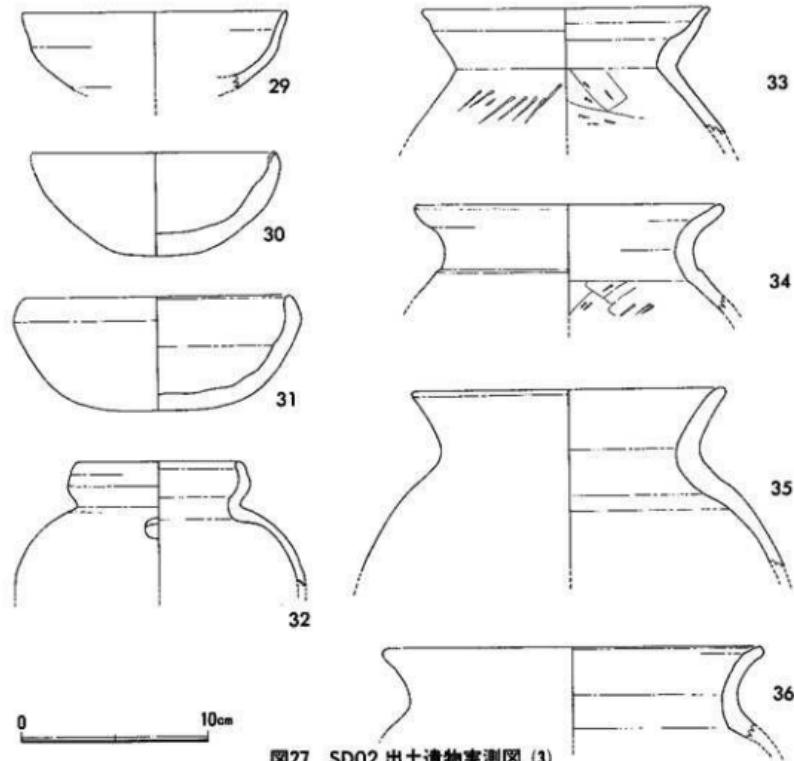


図27 SD02 出土遺物実測図 (3)

SD-02出土遺物（図25・26・27・28）

SD-02からは須恵器、土師器、竈、瓶、石器などが出土している。図25の11、12は須恵器蓋、13～15は壺、16は小壺、17～21は高壺、22、23は瓶である。このうち12は口縁端部外面にヘラで斜め方向の平行線文様が施されている。また15は焼き歪みが見られる。18、19の脚の透かしは三角形を呈し、3方向にあけられている。23は脚部中央付近までヘラケズリが施されている。図26の25は瓶で、外面は基本的に縦方向の刷毛目で、最後に口縁部と底部周辺を横ナデで仕上げている。内面はケズリを施している。底部には孔が穿たれており、残存しているのは1カ所のみであったが、四方にあけられていたと推定される。26は竈の前面ひさし部分である。幅広い厚みがあり、下面是刷毛目調整が施され、二次的な火を受けた痕跡が残る。27は焚き口の右側底部付近である。焚き口部分はわずかに肥厚し、外側に折れ曲がっており、底部は接地面付近に近づくに従って肥厚し、安定感を持たせている。28は竈の受け口付近である。外面は風化しているが、内面は刷毛目調整が施さ

れ、二次的な火を受けた痕跡が残る。図27は全て土師器である。29~31は坏で、いずれも風化のた

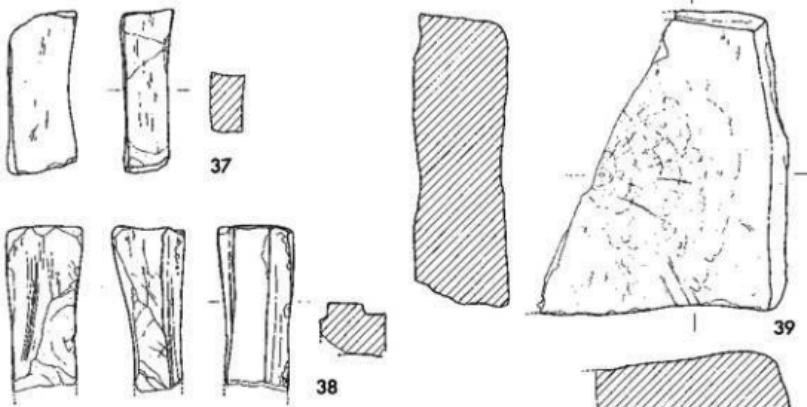


図28 SD02 出土遺物実測図

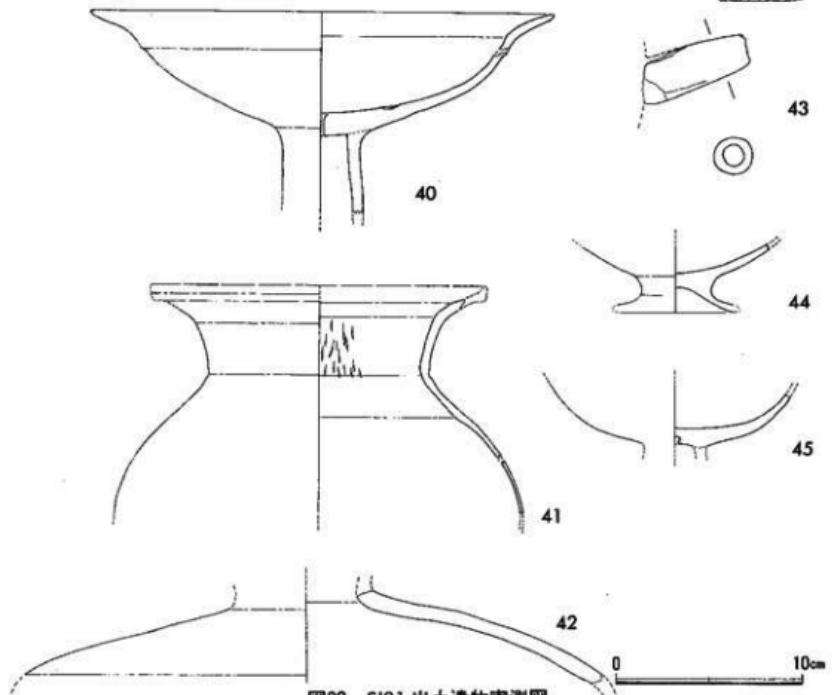


図29 SI01 出土遺物実測図

め調整は明確ではないが、ナデによると考えられる。32の壺は口縁が内傾し、肩部に上向きの孔が穿たれている。内外面とも風化のため調整は不明である。33～36は壺口縁部である。33は比較的焼成が良く、口縁部内面が口唇に向かって薄くなる。肩部外面には右上から左下に向かって平行沈線文が見られる。34は頸部にわずかながら段が作られている。図28は全て石器である。37、38は砥石で、どの面とも自然面が残らないほど使い込まれている。砥面は極めて滑らかである。38は両側を段状に形成し、全ての面を十分に使用している。39は石皿の類であるように思われ、復元すると偏平な方形であったと考えられる。

#### SI-01出土遺物（図29）

図29の40は土師器高坏である。比較的残りは良いが、風化のため調整等は一切不明で、脚部下半を失っている。焼成後に坏部内面から外面に向かって直径5mmの孔があけられている。内面はススの付着が顕著であることから、蓋として転用されたものと考えられる。41は土師器壺である。風化が著しく調整は不明であるが、頸部内面に下から上方向に施されたケズリ痕が残る。胴部器壁は極めて薄く、残存状態は悪い。42は周溝内から出土した壺である。口縁と胴部を欠損し、肩部のみが残存している。内面は二次的な火を受けて変色が著しいことから、蓋に転用されて使用されたと考えられる。43は注口土器の一部である。風化のため調整等は不明である。44は低脚坏、45は高坏であるが、いずれも風化のため調整は不明である。

## 5. 小 結

今回発掘調査を行った四ツ廻遺跡は、狭小な谷を狭む斜面上に営まれた集落跡であった。調査の結果、竪穴住居跡1棟、掘立柱建物跡15棟、溝状造構3、多数のピットを検出した。これらの遺構の多くでは、埋土中並びに床面から多量の土器を検出している。本報告をまとめるにあたって、遺構、遺物の十分な検討が必要であるが、平成5年度調査部分については遺物の整理がまだ十分にできていない段階にある。そこで、ここではこれまで明らかになったことを述べるとともに、詳しい検討は、将来機会を改めて報告することにしたい。

今回検出した竪穴式住居SI-01は古墳時代前期の典型的な角丸方形の住居であった。尾根先端部付近に立地し、必要とする床面を確保しやすい緩やかな斜面を利用しているが、住居の後背側に平坦面を持つところに特徴がある。安来市宮内遺跡でも同様の報告がなされているが、ただ本遺跡の場合、古墳時代中期以降新たな住居を建てるために削平、拡張された可能性が高い<sup>11)</sup>。

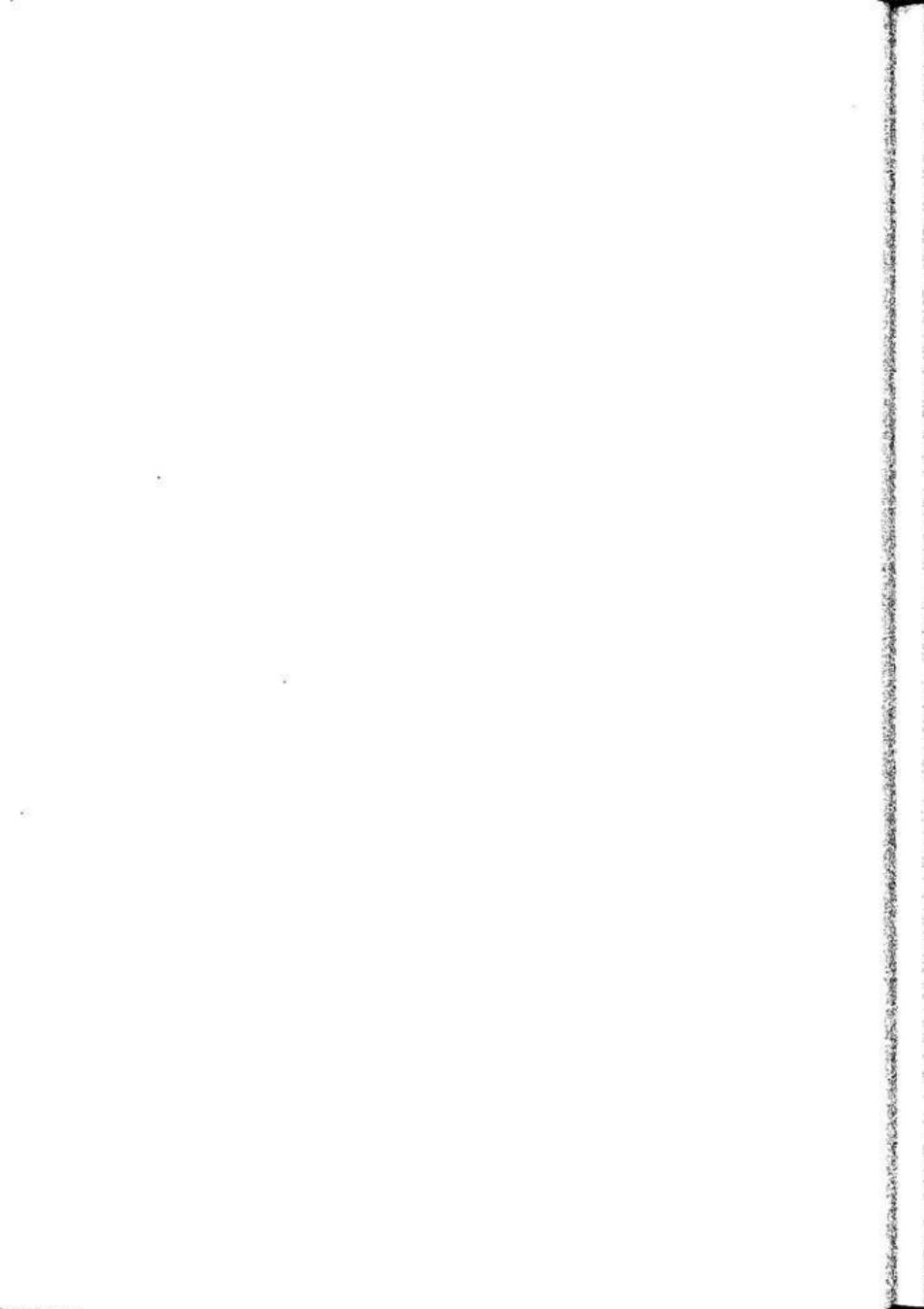
掘立柱建物跡については、その構造から二つに分けることができる。SB-01～04、14、15は標高をほぼ同じにし、床面を十分に確保している。また柱穴も多数存在している。中でもSB-02、03は、床面がほぼ正方形をなしており、一見すると竪穴住居跡ではなかったかと思わせる。一方SB-05～10、13は建物を建てるのに必要な平坦面のみを削り出し、狭小形を示す。このような事例は安来市高広遺跡<sup>2)</sup>、米子市青木遺跡<sup>3)</sup>などのほか、多数報告されている。このように必要な床面を十分に確保している場合と、必要最小限にとどめる場合の二つのタイプが存在することは、掘立柱建物の構造を探る上で、注目していく必要があると考えられる。また出土遺物を見ると、SB-01～04、14、15は古墳時代中期の、SB-05～10、13は古墳時代後期の日常生活で使用される土器を中心であることから、掘立柱建物の構造変遷を探る手がかりを与えるものもあるといえる。

更にこの四ツ廻遺跡に近接して四ツ廻II遺跡があるが、ここからは同時代の玉作工房跡が検出されている<sup>4)</sup>。四ツ廻遺跡が衣食住の場であるのに対し、四ツ廻II遺跡は生業の場であったとも考えられ、当時の集落が、相互にどのような機能的役割を備えていたのか考えていく必要がある。

#### 註

- 1) 島根県教育委員会『一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書IV（越幹遺跡・宮内遺跡）』1933年。
- 2) 島根県教育委員会『高広遺跡発掘調査報告書』1984年。
- 3) 島根県教育委員会『青木遺跡発掘調査報告書I・II・III』1976～1978年。
- 4) 平成5年度、島根県教育委員会により発掘調査が実施されている。

# 写 真 図 版

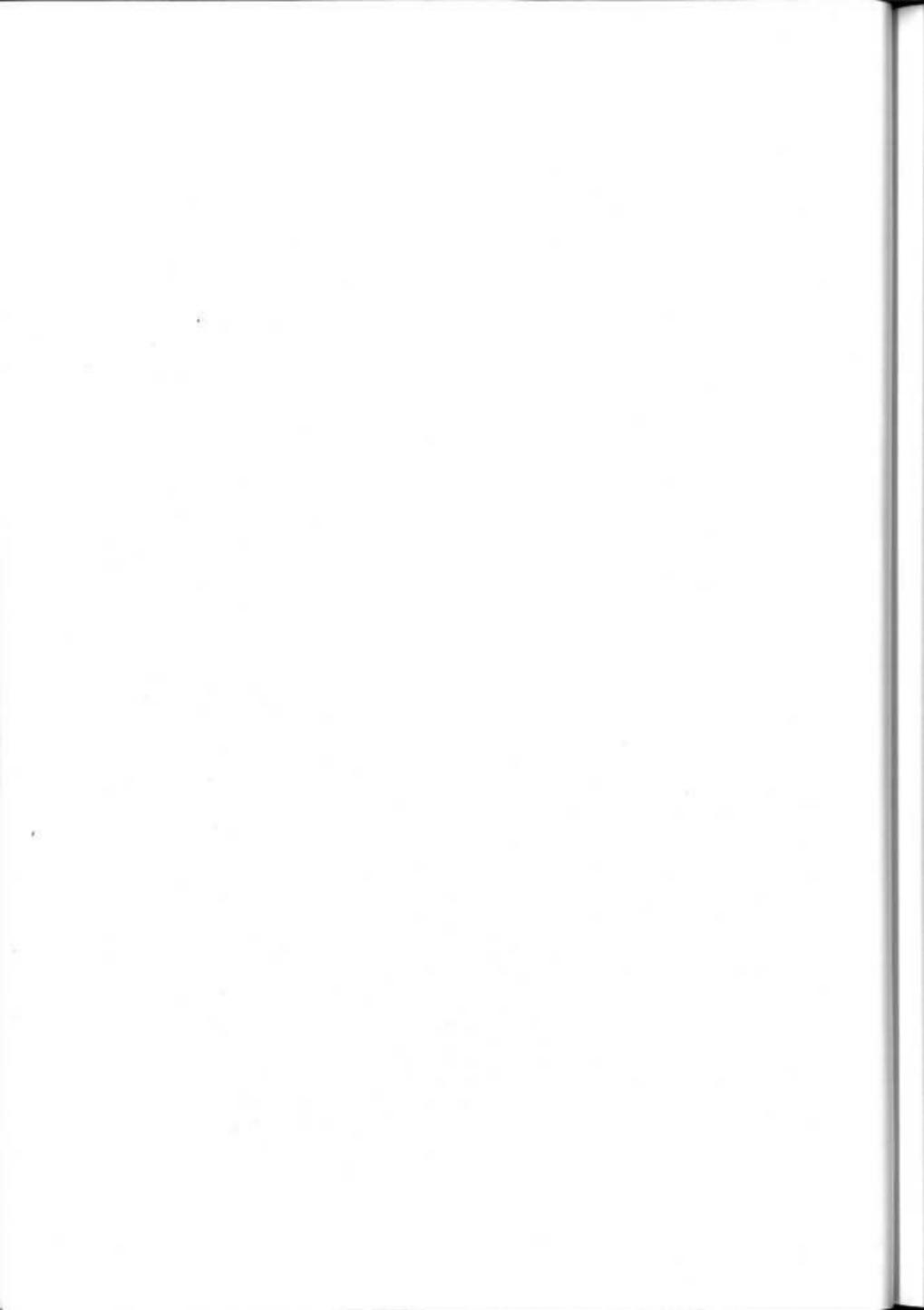




調査前遠景（南から）

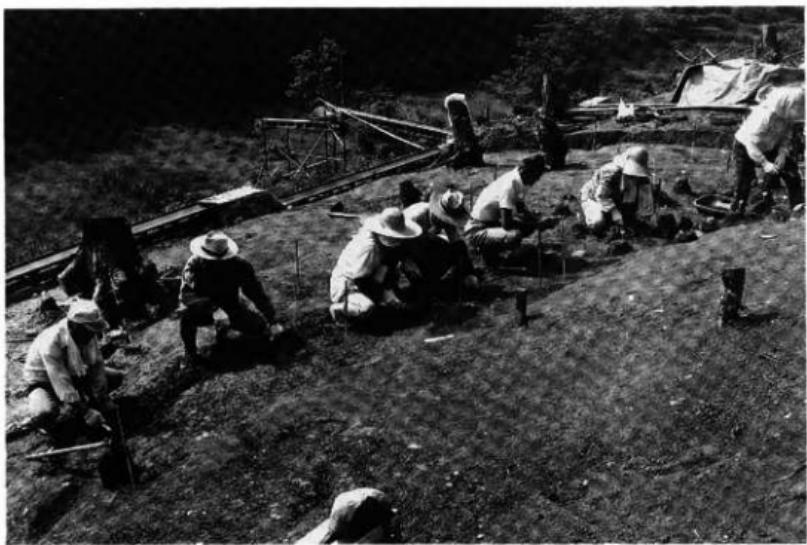


完掘後遠景（南から）

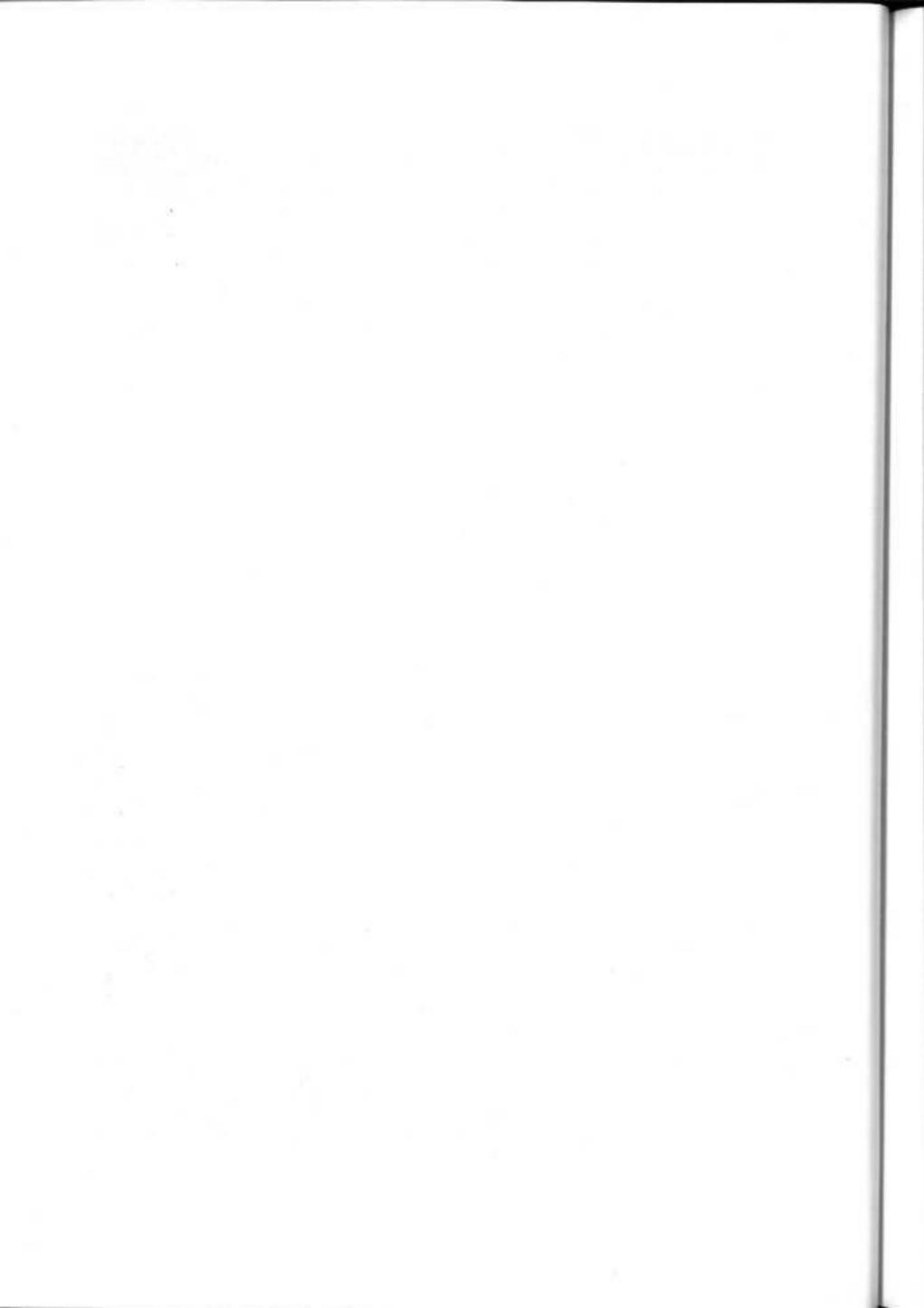


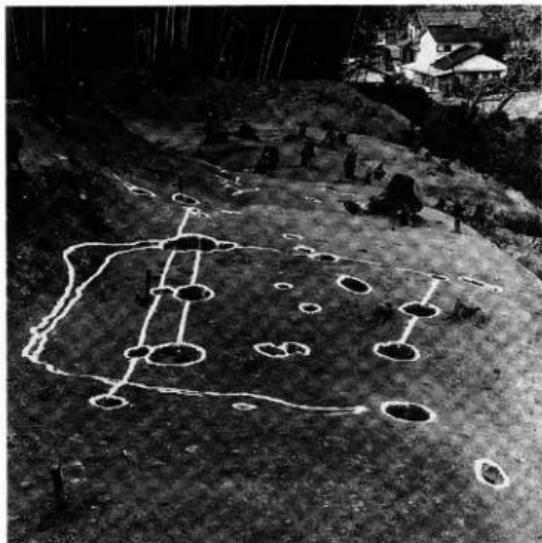


SB01 完掘状況



作業風景

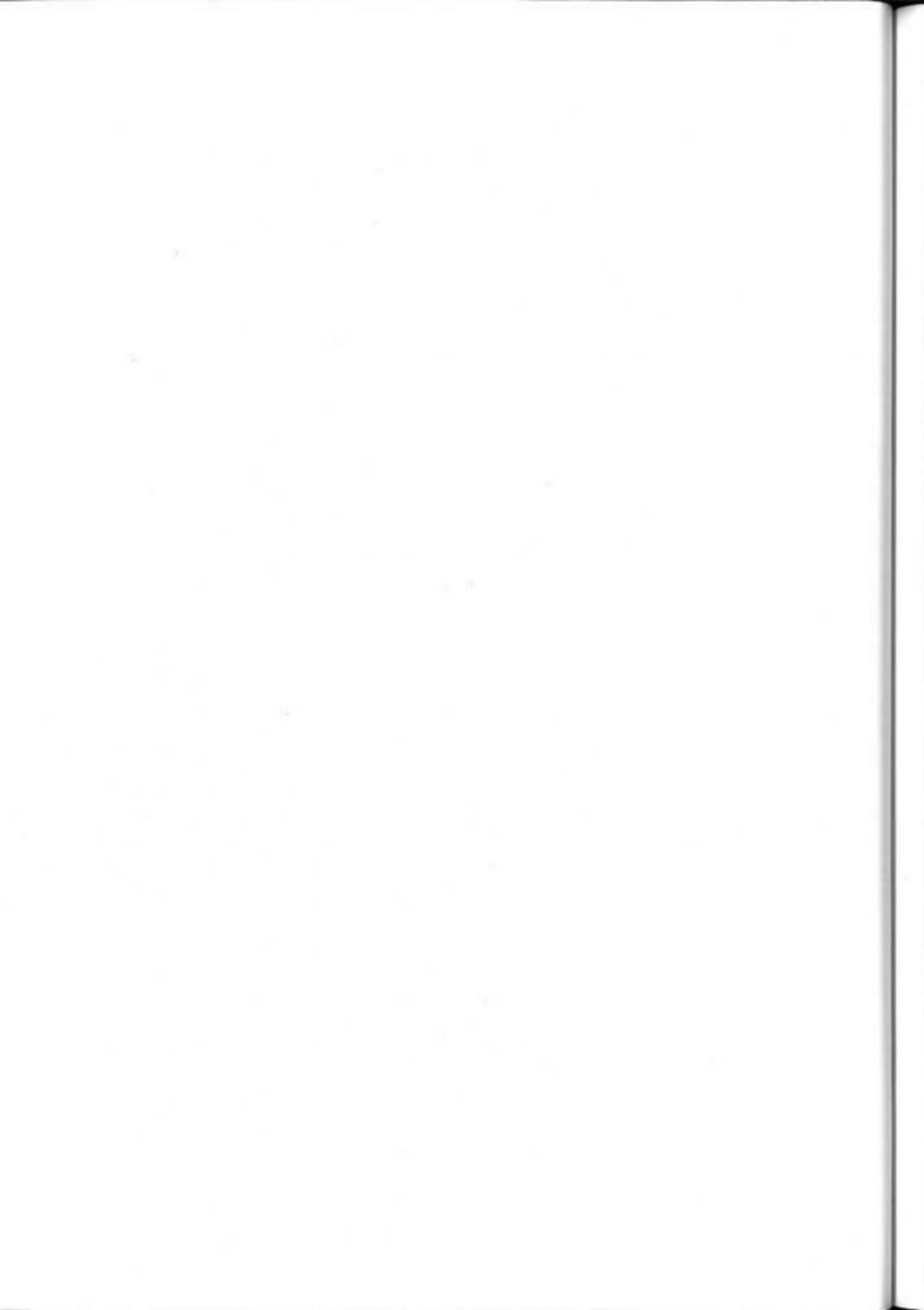


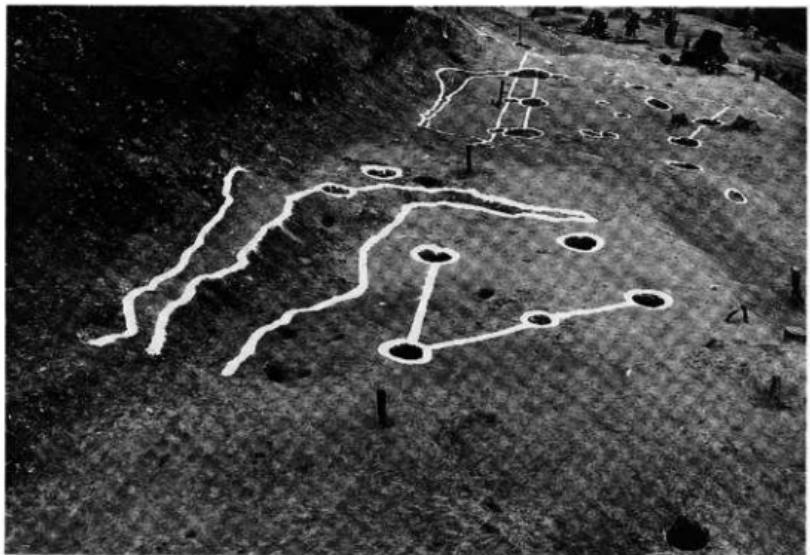


SB02 完掘状況



SB02 遺物出土状況

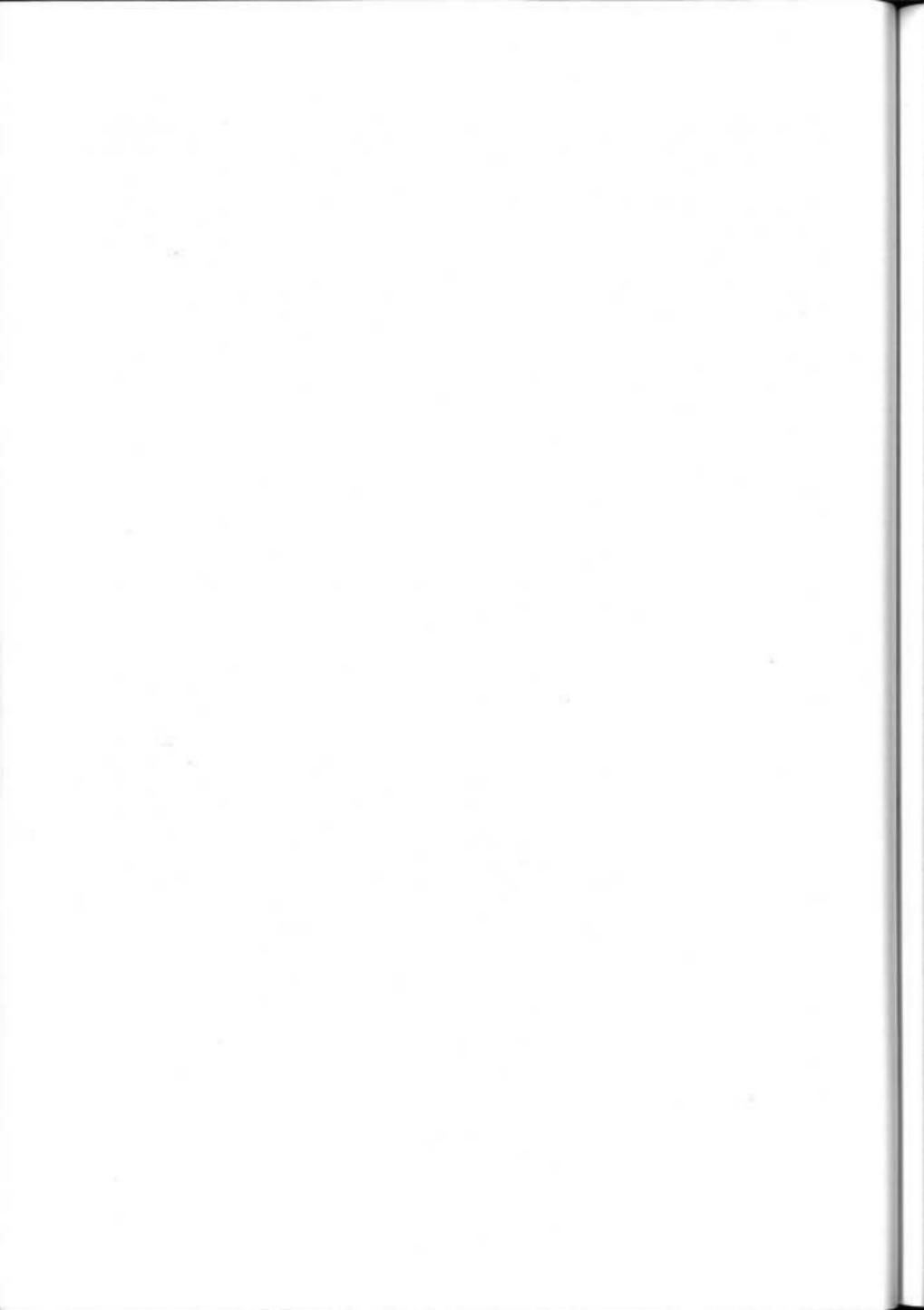


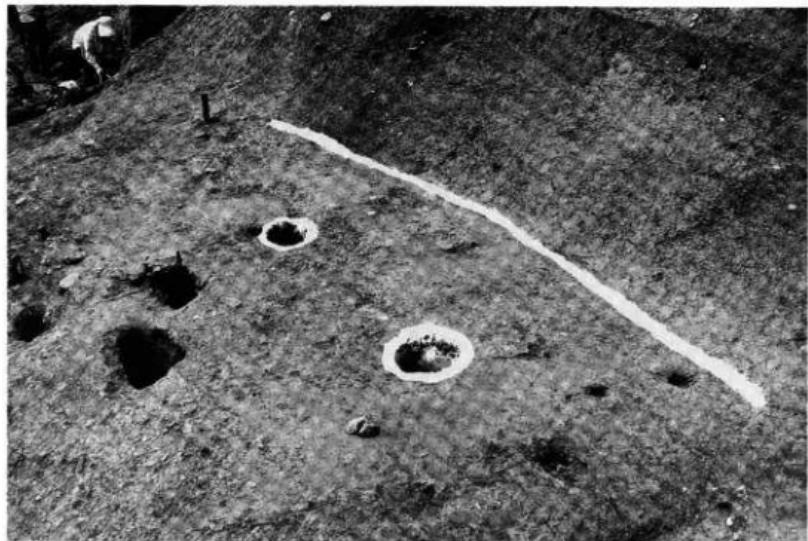


SB03 完掘状況

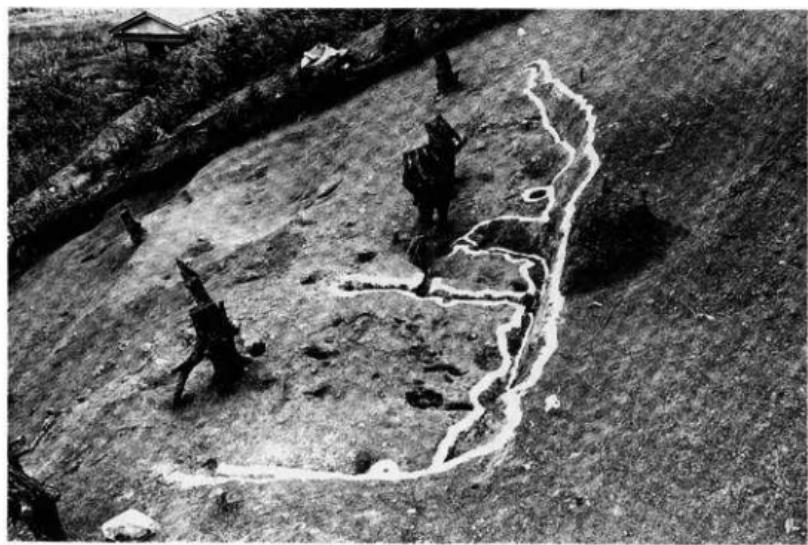


SB04 穴跡完掘状況

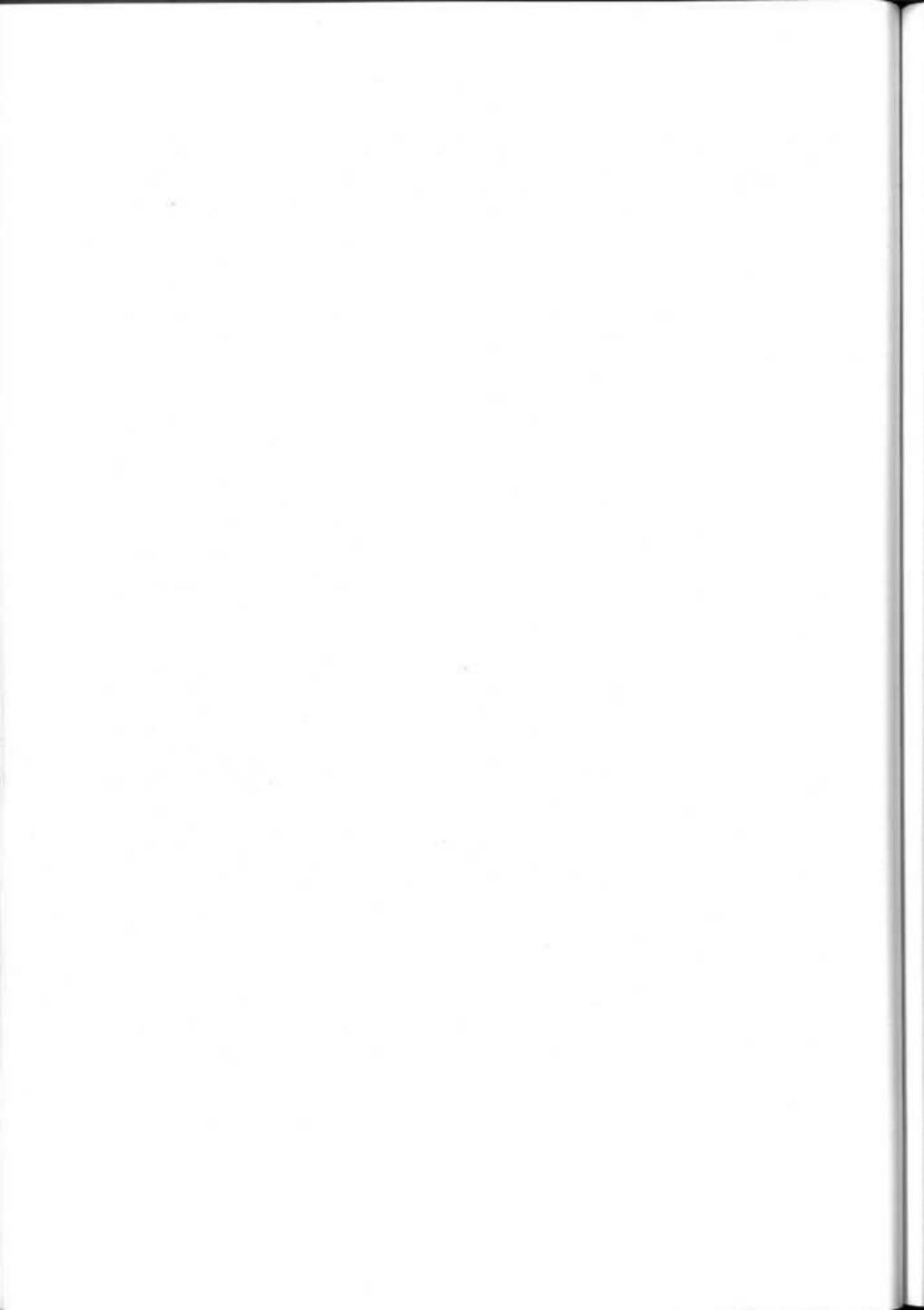


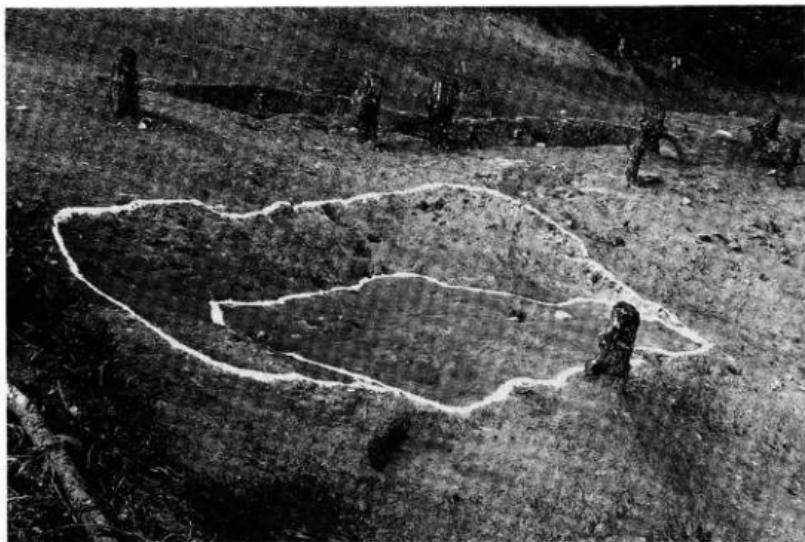


SB05 完掘状况

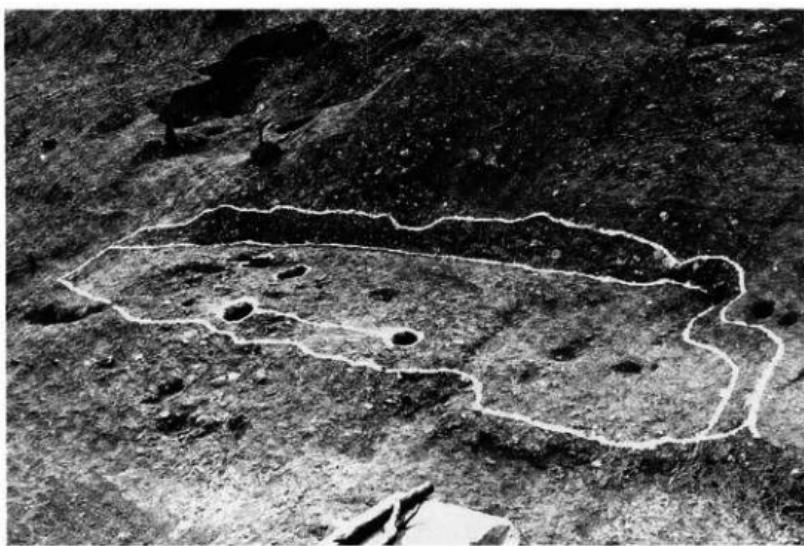


SB06, 06-1 完掘状况

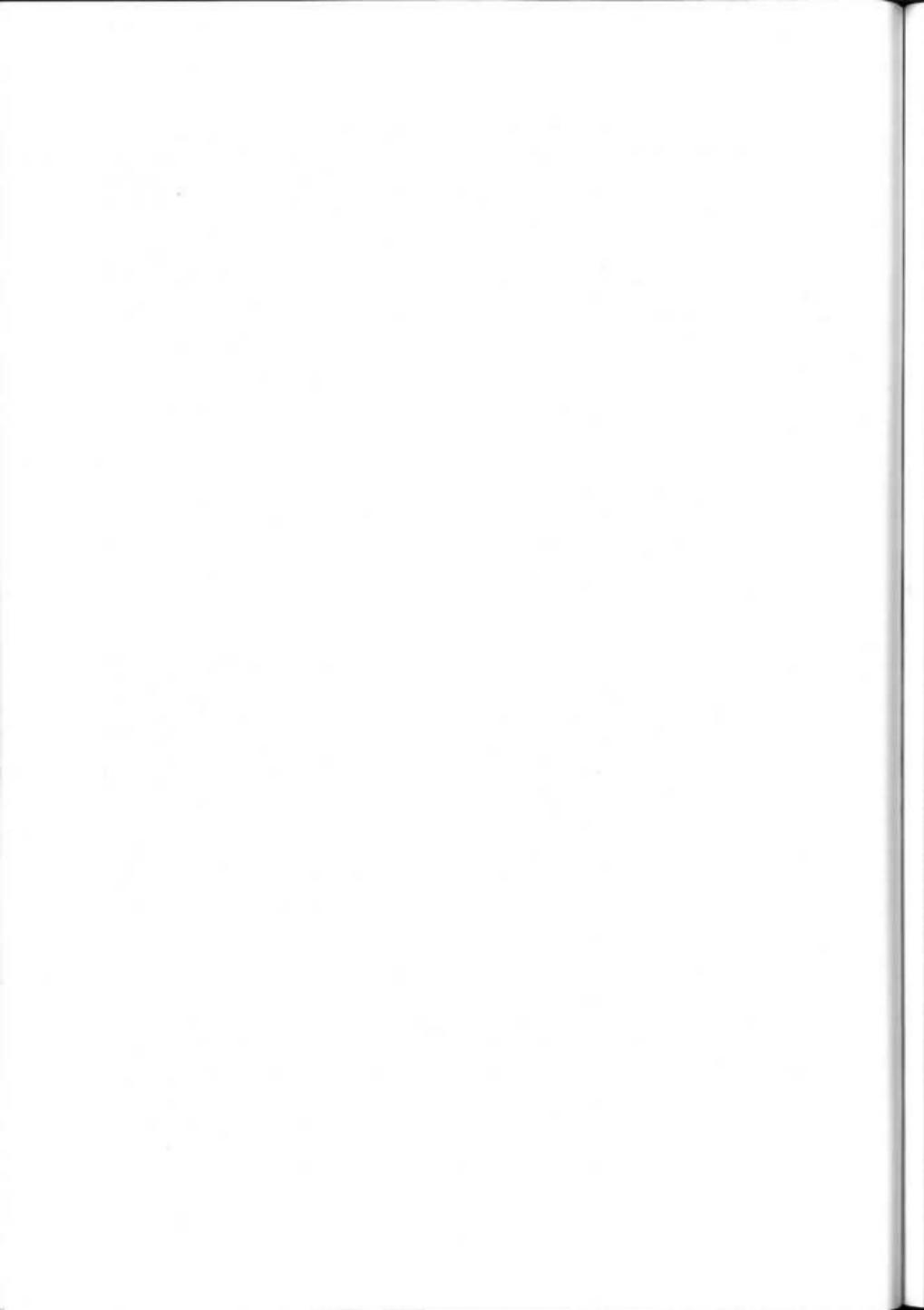


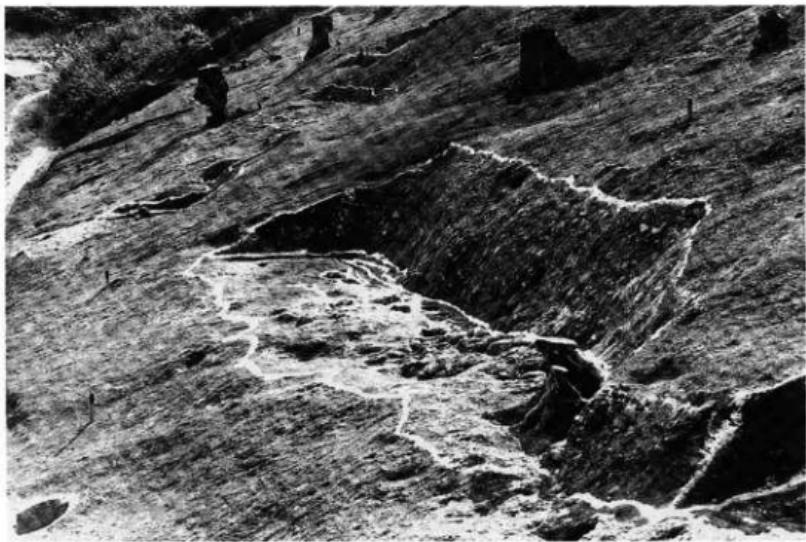


SB07 完掘状況



SB08 完掘状況

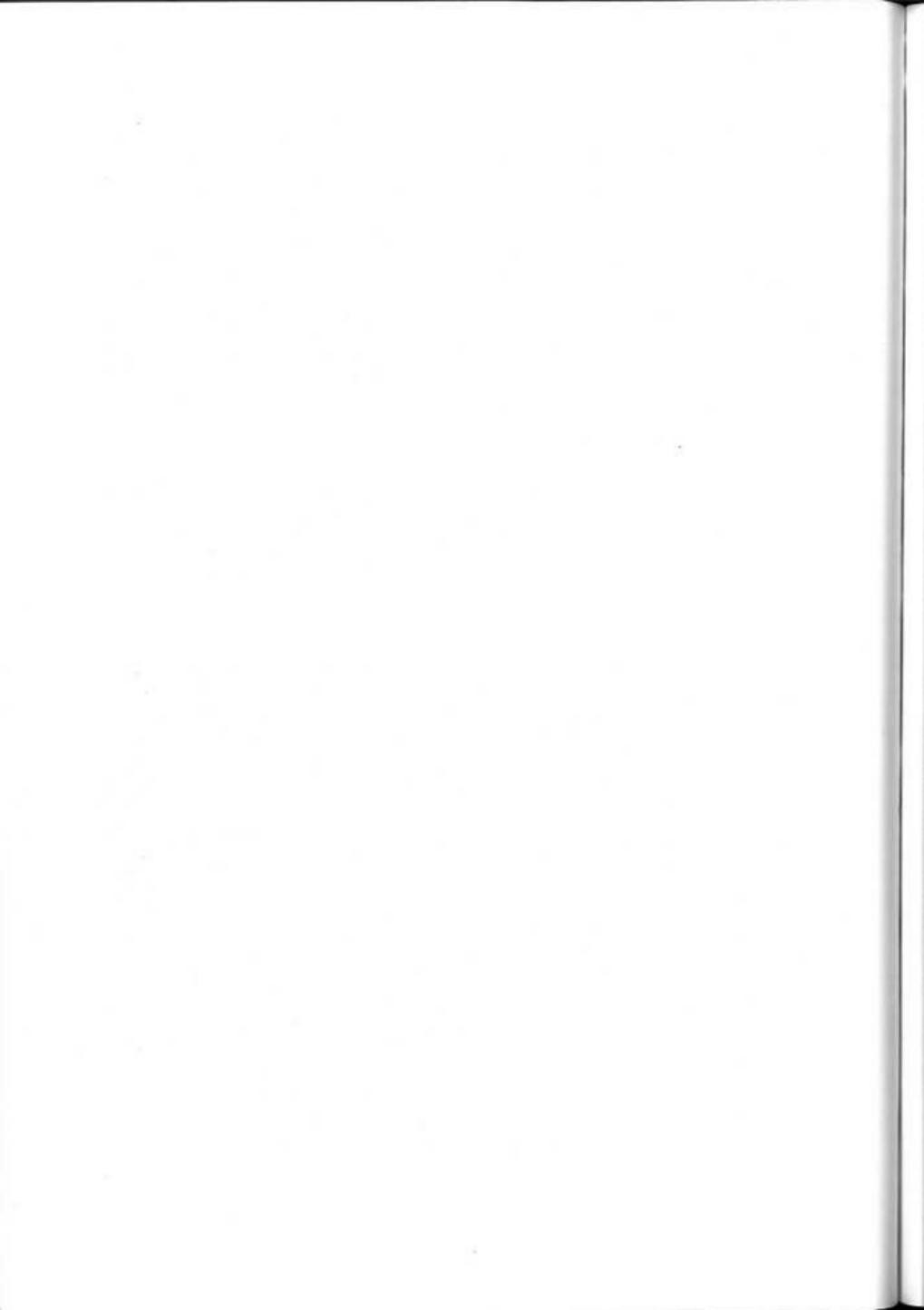


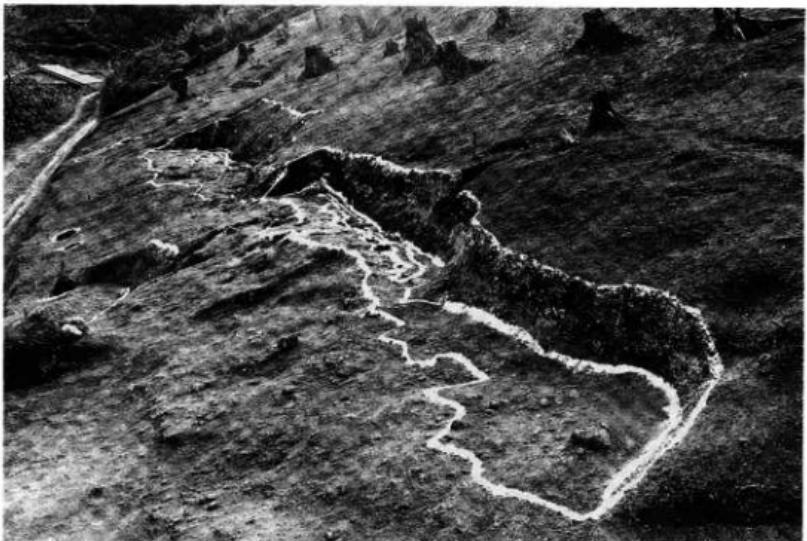


SB09 完掘状况



SB09 遗物出土状况



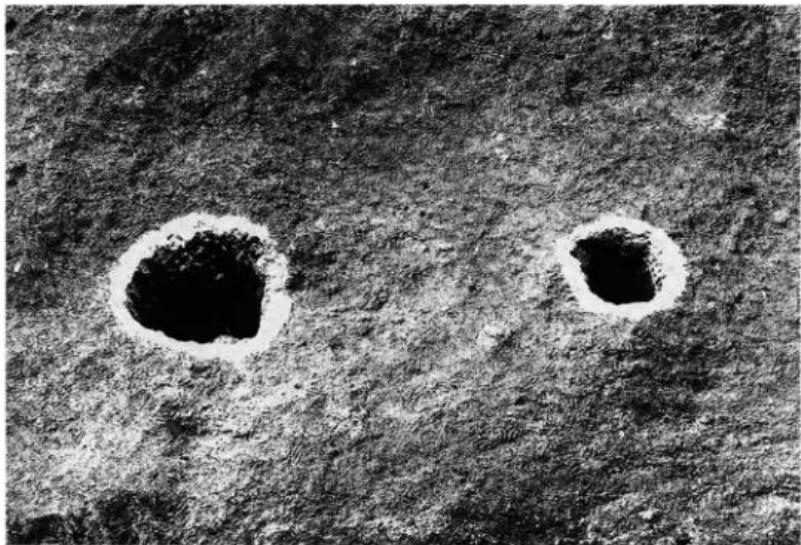


SB10, 13 完掘状况

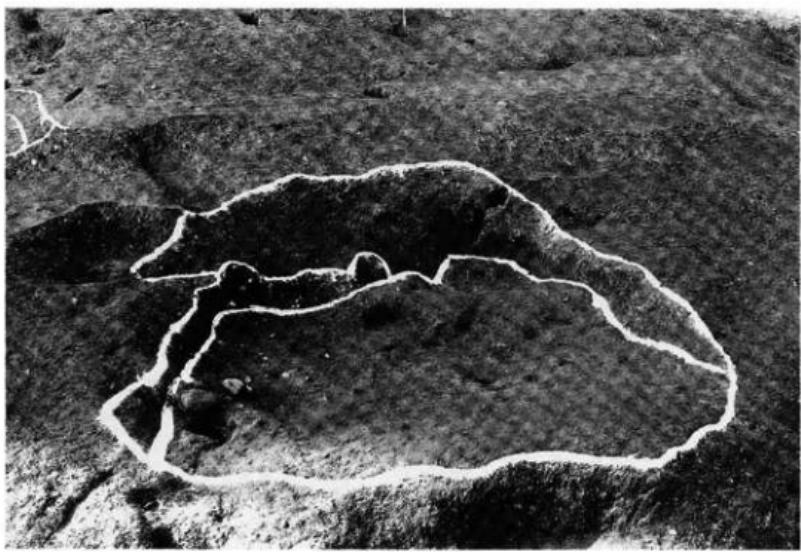


SB11 完掘状况

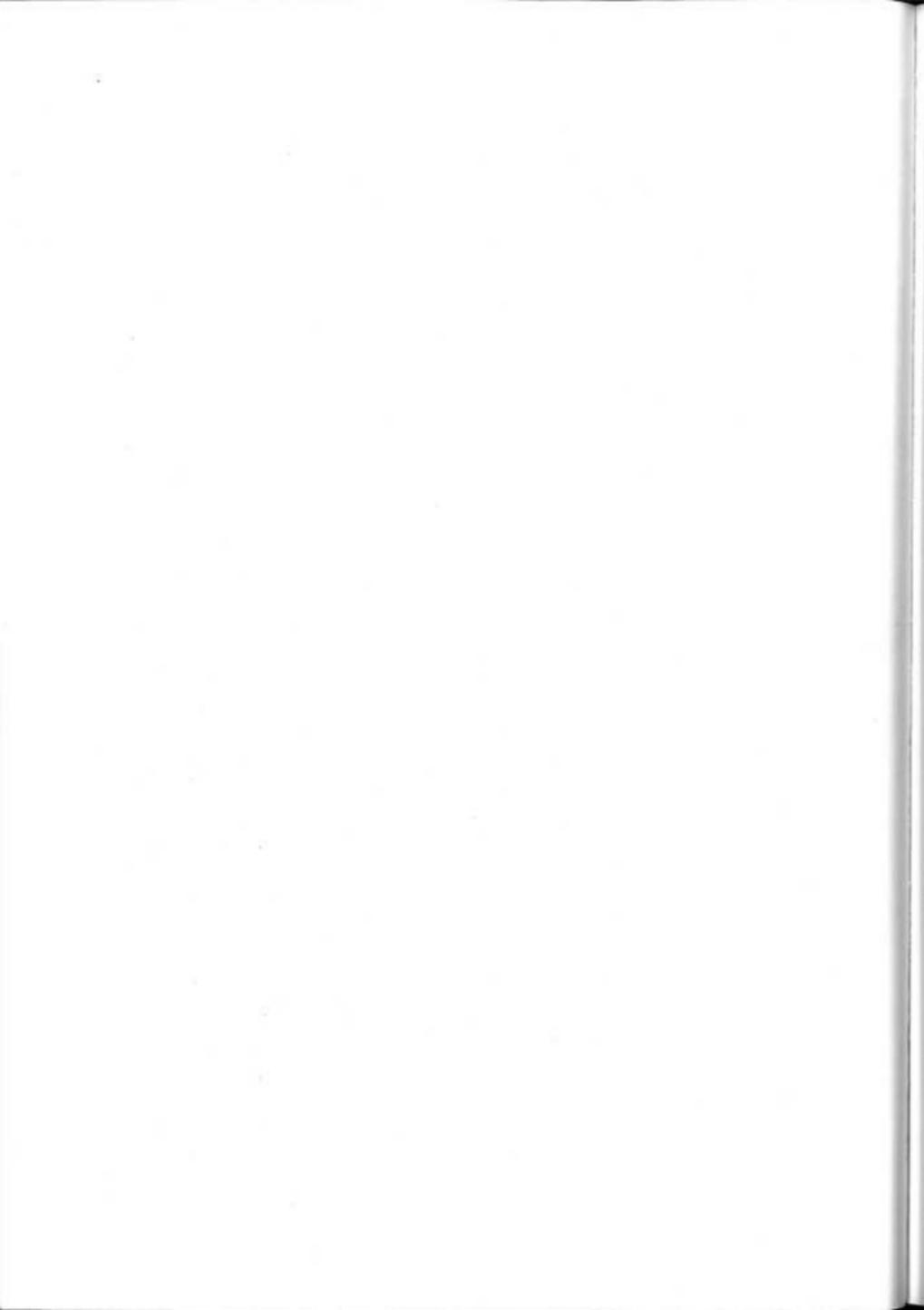


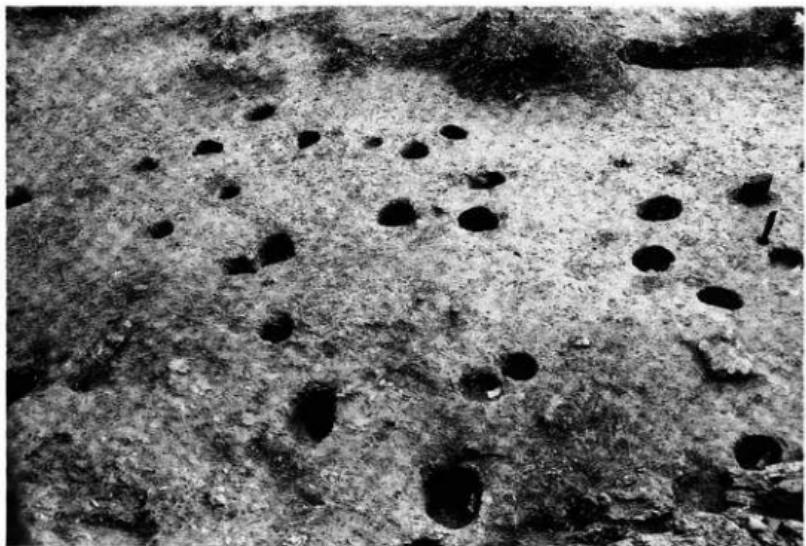


SB11 南側 ピット 完掘 状況

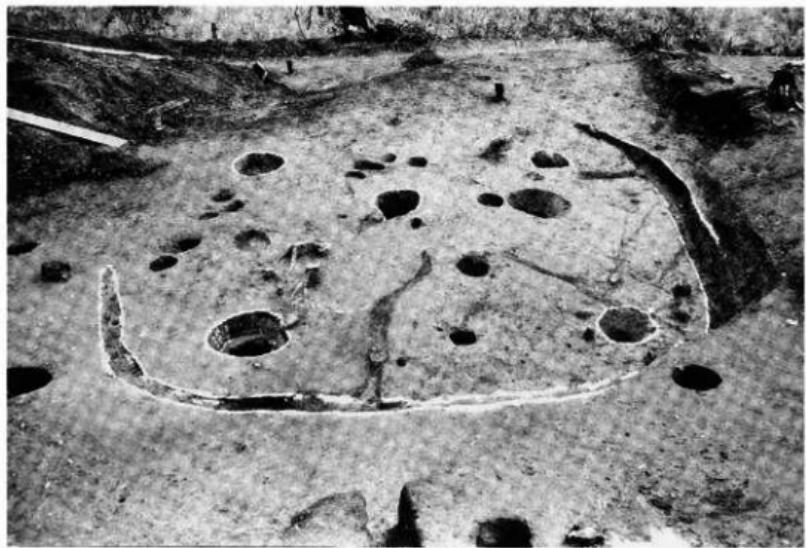


SB12 完掘 状況





SD01 内 ピット 群



SI01 完 挖 状 況

(板)復興區住宅用地造成標準住宅地內  
埋藏文化財免徵課稅方案

## 四、遺跡

1984年3月

編輯：新竹市土地開發公司  
審查：新竹市教育委員會  
印 刷：怡村印刷有限公司